事例紹介

「マレイシア国サバ州生物多様性保全プログラム協力」

－齋藤克郎（ＪＩＣＡ 森林・自然環境協力部森林環境協力課長）－

○安藤（司会進行）　それでは、プレゼンテーションの最後になりましたが、事例紹介「サバ州生物多様性保全プログラム協力」と題しまして、国際協力事業団森林・自然環境協力部森林環境協力課長の齊藤克郎より発表させていただきます。

紹介させていただきます「サバ州生物多様性保全プログラム協力」は、現在、本格的な協力の事前準備段階にありまして、マレイシア側と共同作業で協力の内容をデザインしている最中でございます。

○齊藤　こんにちは。只今（ただいま）ご紹介いただきましたＪＩＣＡ森林環境協力課の齊藤と申します。手づくりの拙（つたな）いものなんですけれども、パワーポイントを使いながらプレゼンテーションさせていただきます。

〔スライド（63～68ページ参照）〕

〔スライド１〕　話の中心の部分は、今、橋本先生に大方言われてしまいましたので重複があるかと思います。最初におさらいという意味で、ＪＩＣＡがどんなことをやっているか、まずそこからお話をしたいと思います。

〔スライド２〕　専門家の派遣というのは、人博の橋本先生、中西先生のような技術者の方々、専門家の方々を相手の国に派遣して技術指導していただくという事業です。また、現地のカウンターパートの方々に日本に来ていただいて研修を受けていただく研修事業、ボランティアの派遣、この中には皆さんがご存じの青年海外協力隊がございます。さらに、最近できた制度でシニア海外ボランティアというのもございます。こうしたボランティアの派遣というのもＪＩＣＡ事業の重要な１つでございます。そうしたものを統合的に技術協力プロジェクトという形で実施していく制度もございます。

このほかに、開発調査ですとか、無償資金協力事業の実施促進（そくしん）、さらには、国際緊急援助隊――地震やそのほかの災害があったときに、日本から医療チームやそのほかの援助チームを出すという国際協力。このようにＪＩＣＡの協力は非常に多岐（たき）に渡るといいますか、逆に言うと、現状のＪＩＣＡの協力は非常にまとまりがないというのが１つの側面かと思います。

〔スライド３〕　今回対象となりますサバ州ですが、ご覧のとおり、土地利用の区分が複

雑になっていまして、特に薄緑で囲ってあるそのほかの森林部分は、伐採権、コンセッション（Concession；土地使用権）が設定されていたりして、既に伐採が入っているというようなところも多く、現状の自然とが失われていると考えられます。さらに、国立公園や野生動物保護区などがございますが、これがそれぞれ管理主権が違うというのが、サバ州での協力体制に問題になるのかと思われます。では、関連するサバ州内の政府機関はどんなものがあるか、整理してみたいと思います。

〔スライド４〕　まず、再三出てまいりましたサバ大学です。そのほかに森林局があり、サバ財団、環境保全局、土地測量局、サバ・パークス、森林研究所、野生動物局、科学技術部、ざっと挙げてもこのくらいあります。それぞれが、それぞれの責任において、それぞれの管轄で仕事をしています。また、サバ大学は研究機関ですが、それ以外は行政機関です。サバ大学はマレイシア政府の国立機関であり、それ以外の行政機関は、サバ州政府ムスタファ官房長のもとにある機関で、ここにも１つの区分けがあるという状況になっています。このほかにも、保護区管理、研究、環境教育、そのほかの組織制度づくりや施設の強化、こういった多様な課題を抱えております。組織が多様であり、また課題も多様であるというのが現状認識であります。

〔スライド５，６〕　つまり、ＪＩＣＡが今回取り組もうとしている「プログラム協力」は、ＪＩＣＡ側の機動力、先方の縦割り組織と課題などが障害となり、効果的な保全を図ることが難しいのではないか、これがＪＩＣＡ側アプローチの問題認識です。

〔スライド７〕　少し、ＪＩＣＡについて振り返ってみましょう。これまでのＪＩＣＡ協力というのは、ＪＩＣＡがあり、相手側に１つの実施機関があるというものです。例えばＪＩＣＡとサバ大学という、１つだけの機関と協力して実施するもので、相手側機関と一緒に１つのスキーム――スキームというのはＪＩＣＡの協力形態、例えば協力隊ですとか、あるいは専門家派遣です。そうした１つの仕組みを使って１つの課題に取り組んでいこうと、非常にシンプルな構造での協力をやってきています。もちろんこのようなシンプルな協力形態ばかりではないのですが、単純化してしまえばこういうパターンが多かったということです。

〔スライド８〕　これに対して、今回は先方の問題も複雑ですし、関係機関も複雑です。であれば、ＪＩＣＡは先方機関、関係機関のすべてをカウンターパートしましょう。なおかつ、ＪＩＣＡ側で導入可能なスキームというのはすべて導入して、先ほど挙げた複数の課題に対して同時並行で取り組んでいこうと考えたのです。そして、今までの「プロジェクト」という言い方に対して、包括的にアプローチをしていこうという気持ちを込めまして「プログラム協力」という言い方をしているのです。

〔スライド９〕　ただ、課題を無秩序に同時並行にやるということではなく、一定の戦略、重点分野についてやっていこうということで、これは橋本先生の発表や村田企画官のご挨拶の中にもありましたが、このプログラム協力には４つのコンポーネントというのを設定しました。具体的には研究、保護区管理、野生動物回廊の設定、環境教育という４つの分野に対して、それぞれ関係する機関と協力・実施していくものです。例えば、研究分野であればサバ大学、森林局、野生動物局、サバ・パークス、サバ財団、保護区管理分野であればそれぞれの関係機関ということで、課題に対応する実施機関をそれぞれの課題ごとのカウンターパートとして、一緒に協力していこうと考えています。このスライドの、太い青線で囲んである機関が、それぞれのコンポーネントの実施責任機関という位置づけをして、そこが取りまとめ役となって、それぞれのコンポーネントを基本的には進めていただく。それ以外の機関は協力機関として、それぞれの課題に対して自分たちの役割の中で仕事をしていただく、そういう仕組みを考えています。

〔スライド 10〕　では、日本側はどういうことをやっていくかというと、総力を挙げてというのも大げさですけれども、専門家、青年海外協力隊、日米ＮＧＯの方にもご協力いただき、開発調査のスキームも使い、機材はもちろん、必要なものをすべて投入していく。そのあとに、インフラ整備の部分でも協力していこうということです。

〔スライド 11〕　ここで、プログラム協力、日本サイドでの複数のスキームによる協力、それから先方の複数の機関に対する同時並行的な協力、これらの狙い、効果というのは何を期待しているかということを若干整理してみます。今まで、先方政府の中でさまざまなご努力が払われているわけですけれども、お互いの機関が連携して施策・対策を実施できるということ、つまり情報が共有化できる、無駄がなくなる。それから投入資源、これは日本側からもありますし、マレイシア側からの投入でもあります。例えば、同じ機材が複数の機関にある必要は必ずしもないわけで、１つの機関にある機材をお互いに利用できるような仕組みをつくっていく。資源の最適配分というのができるのではないかということ。最終的には、サバ州内での実施機関の間での連携のメカニズムというのがつくられることによって、長期的に自然保護に対する取り組みができるようになることを目標に、総合的な生物多様性保全のアプローチができればというのが狙いでございます。

〔スライド 12〕　具体的な運営体制としては、プロジェクトのプログラム合同調査委員会を設置します。そこの長として、本日お越しいただいているサバ州政府ムスタファ官房長、副議長としてサバ大学長、ＪＩＣＡ側からはチーフ・アドバイザーが就きます。そのもとに関係機関、特にメンバーとして、先ほどの４分野のワーキンググループの代表に入っていただきます。それから、マリアッティ先生の務めているサバ大学熱帯生物保全研究

所が事務局となって、全体のプログラムを運営していく、このような形の協力を考えています。

ＪＩＣＡの中で「プログラム協力」というのは、新しい試みであるとこれまで言ってきました。この協力は、できる限りのＪＩＣＡスタッフを動員し、相手国の実施機関や複数の協力機関と一緒にやっていく、我々ＪＩＣＡにとっては挑戦的な試みです。ぜひとも皆さんのご意見も伺い、ご支援をいただきながら進めていければと思っています。よろしくお願いいたします。

ありがとうございました。（拍手）

発表スライド（斎藤克郎）

〔スライド１〕

マレイシア国

サバ州生物多様性保全プログラム協力

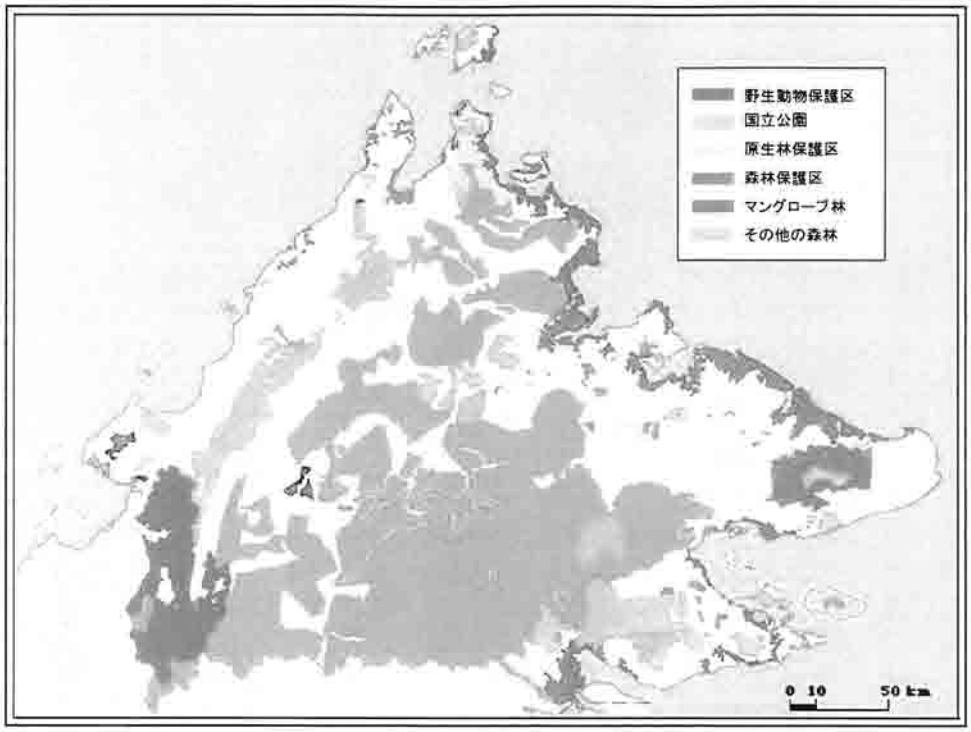
国際協力事業団
森林・自然環境協力部
森林環境協力課　斎藤克郎

〔スライド２〕

国際協力事業団（JICA）の業務

- 専門家の派遣
- 研修員の受け入れ
- ボランティアの派遣
  - 青年海外協力隊
  - シニアボランティア
- 技術協力プロジェクトの実施
- 開発調査の実施
- 無償資金協力事業の実施促進
- 国際緊急援助隊の派遣　等

〔スライド３〕



〔スライド４〕

生物多様性保全に関連するサバ州政府機関

サバ大学 UMS	**環境保全局** ECD	**森林研究所** Forest Research Inst.
森林局 Forest Dept.	**土地測量局** Land & Survey Dept.	**野生動物局** Sabah Wildlife Dept.
サバ財団 Sabah Foundation	**サバ・パークス** Sabah Parks	**科学技術部** Science & Tech. Unit

〔スライド5〕

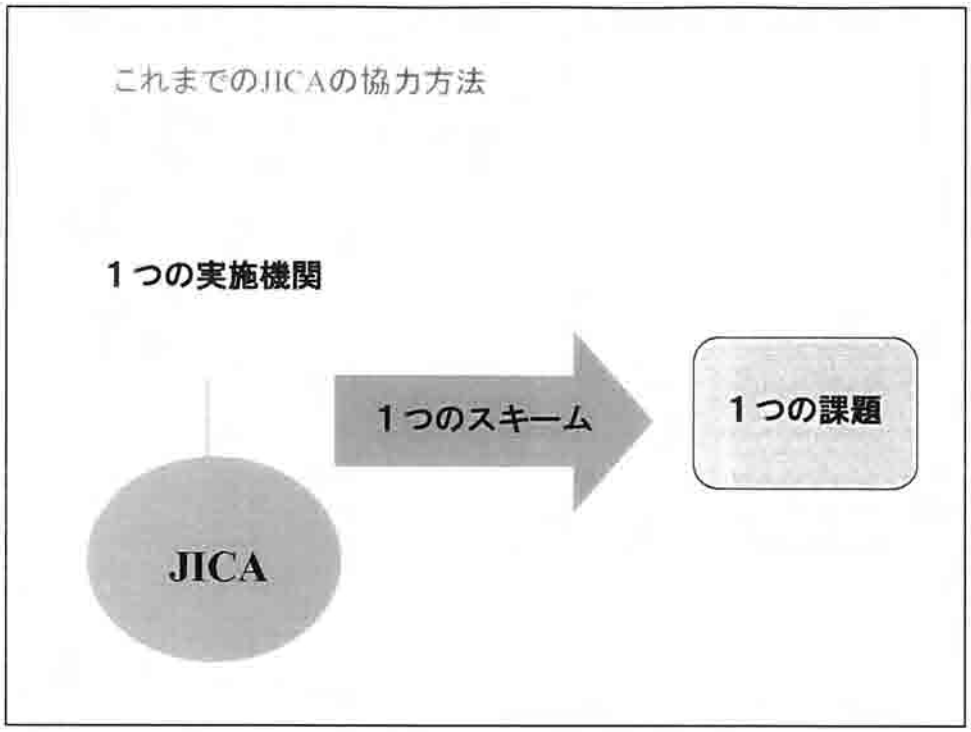
生物多様性保全に関する課題

保護区管理 PA Management	村落開発 Community Dev.	インベントリー Inventory
希少種保護 Rare species	モニタリング Monitoring	組織・制度強化 Institutional Dev.
ｴｺ･ﾂｰﾘｽﾞﾑ Eco Tourism	環境教育 Public Awareness	人材養成 Human Resouce Dev.
研究 Research	野生動物回廊 Wildlife Corridor	施設・機材整備 Facilities & Equipment

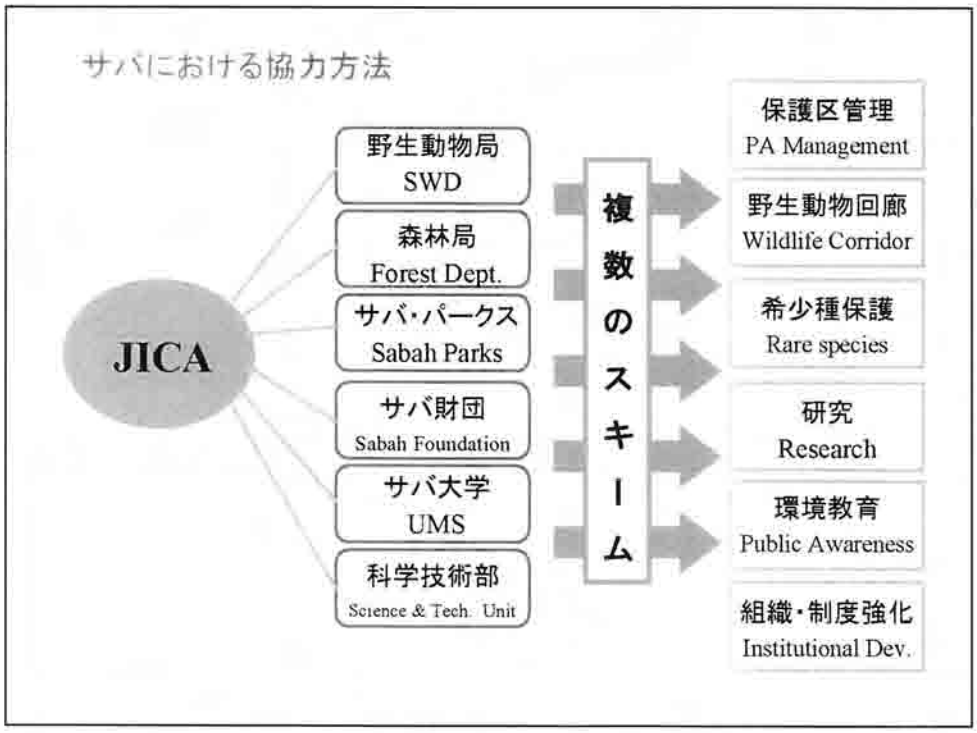
〔スライド6〕

		課題									
		研究	モニタリング	保護区管理	希少種保護	野生動物回廊	村落開発	環境教育	インベントリー	エコ・ツーリズム	組織強化
実施機関	サバ大学	○	○	○	○	○		○	○		○
	野生動物局		○	○	○	○	○	○	○	○	○
	サバ・パークス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	サバ財団		○	○	○	○	○	○	○	○	○
	森林局	○	○	○		○	○		○	○	○
	科学技術部			○		○	○	○		○	
	環境保全局		○	○	○						

〔スライド7〕

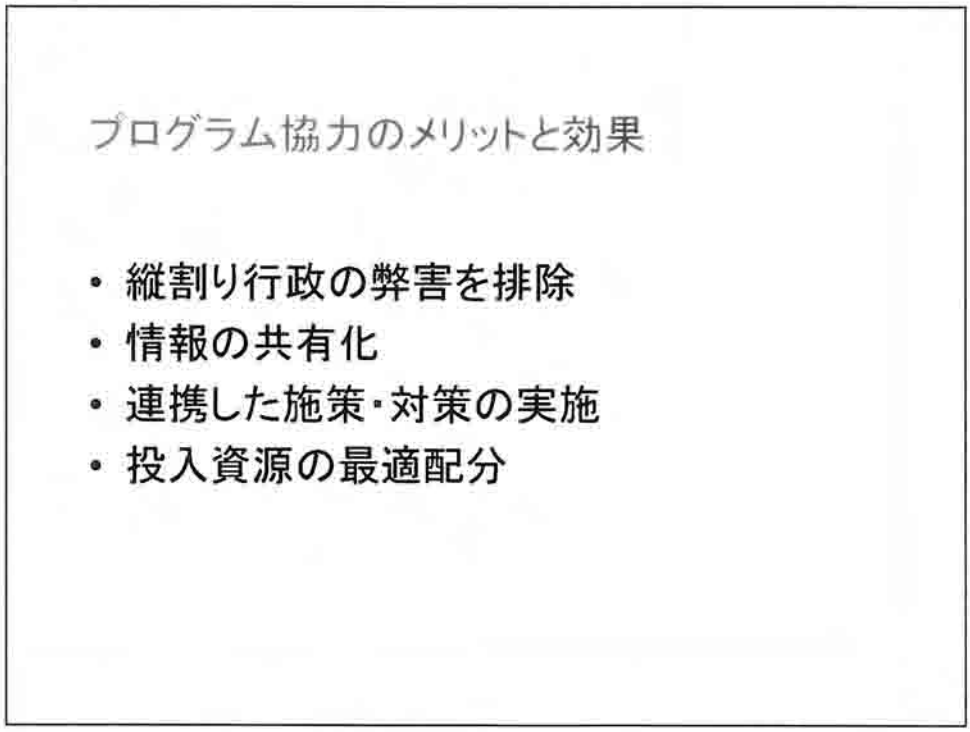

これまでのJICAの協力方法
1つの実施機関
1つのスキーム
1つの課題
JICA

〔スライド8〕

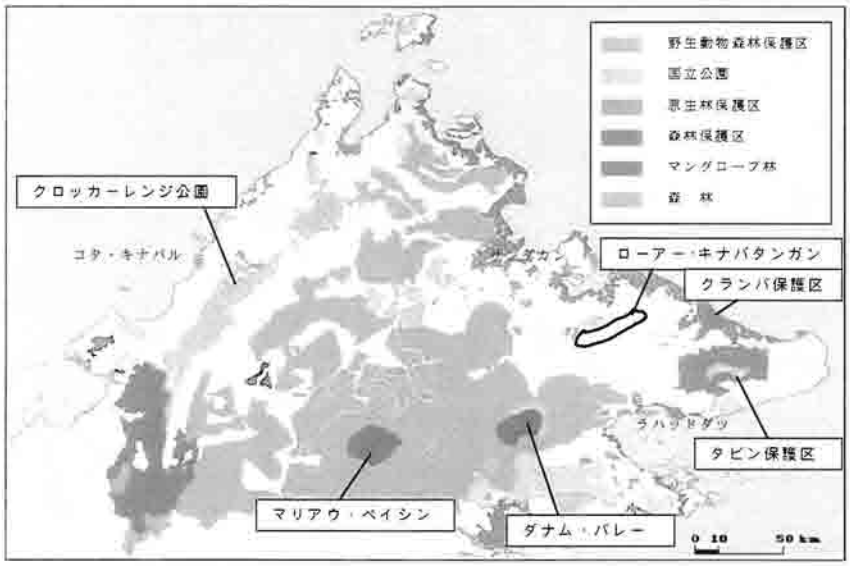

サバにおける協力方法
JICA
野生動物局
SWD
森林局
Forest Dept.
サバ・パークス
Sabah Parks
サバ財団
Sabah Foundation
サバ大学
UMS
科学技術部
Science & Tech. Unit
複数のスキーム
保護区管理
PA Management
野生動物回廊
Wildlife Corridor
希少種保護
Rare species
研究
Research
環境教育
Public Awareness
組織・制度強化
Institutional Dev.

〔スライド９〕

〔スライド 10〕

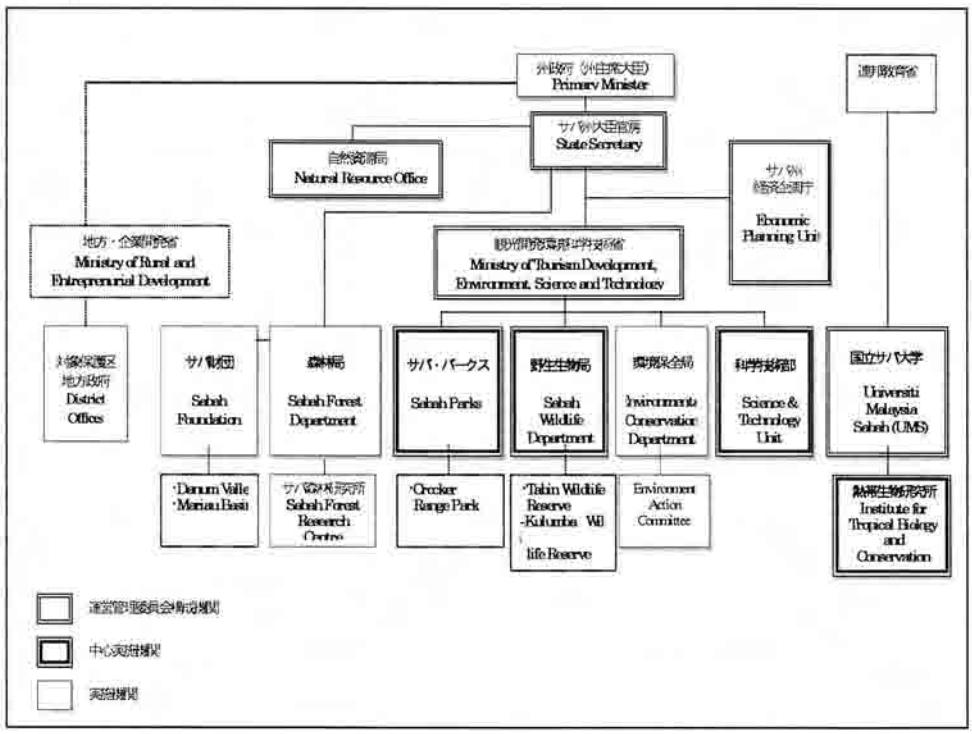


〔スライド 11〕



プログラム協力対象計画地域

〔スライド 12〕



パネルディスカッション
「ボルネオの生態系保全のために日本は何ができるか」

○安藤（司会進行）　それでは、時間となりましたので、パネルディスカッションに移りたいと存じます。

本日は「ボルネオの生態系保全のために日本は何ができるか」をテーマといたしまして、各界の六名のパネリストの方々にご討議をいただきます。コーディネーターはＪＩＣＡ森林・自然環境協力部計画課長草野孝久が務めさせていただきます。

草野は、先ほどご紹介させていただきました「サバ州生物多様性保全プログラム協力」の形成におきまして、二度、現地の方で調査活動に従事しております。

それでは、パネリストの皆様、よろしくお願いいたします。

○草野 孝久（コーディネーター）　こんにちは。只今（ただいま）ご紹介いただきました草野でございます。よろしくお願いいたします。

後半のパネルディスカッションは、「ボルネオの生態系保全のために日本は何ができるか」というテーマで進めていきたいと思います。

自然保全というのは調査研究だけでもだめで、それをいかに保護するかという活動、そして資源をどううまく利用していくかということを総合的に動かして初めて、保全というものが持続的に可能になるのであろうと考えております。そういった意味で、少し広めに日本、あるいは日本人として、日本に一番近いメガダイバーシティ（megadiversity）のボルネオ島の自然を守っていくために何ができるのかということを議論していきたいと思います。後半の部分には会場の皆様方のご意見やご質問をいただく用意をしておりますので、よろしくお願いいたします。

パネリストの方々をご紹介いたします。

左の方から、女子栄養大学文化人類学研究室教授秋野晃司さん。秋野さんは東南アジアの民族的研究がご専門で、インドネシア、マレイシア、ベトナムなどを中心にフィールドワークを展開しておられまして、「食と健康の文化人類学」などの著書がございます。ボルネオは、秋野さんが民族学研究の初めのころに携わった、思い出のある地域ということをお聞きしておりますので、今日はおもしろいお話をお聞きできることを期待しております。

次に、朝日新聞アジアネットワーク主査の川崎剛さん。川崎さんは、現在、アジアの環境とエネルギーチームの主査をなされております。これまでのフィールドとしては、主にアフリカを中心に取材活動などをされておりますけれども、環境とエネルギー論や国際関

係論の方をご専門となされて記者活動をされておられます。今日はジャーナリズムの観点から、この協力のあり方について、おもしろいお話を聞かせていただきたいと思います。

次に、法政大学人間環境学部教授菊地邦雄さんです。菊地さんは財団法人自然環境研究センターの上級研究員であり、ＩＵＣＮ（国際自然保護連盟）のアジア支部の副議長などをなされております。元環境庁（現環境省）で国立公園管理官や自然保護局野生生物課長などをなされ、審議官を退官されて現在に至っております。環境行政、環境保護論、環境管理計画などを専門とされまして、「英国の自然環境保全法制度」等の著書がございます。よろしくお願いいたします。

次に、環境省大臣官房付の高橋進さんです。高橋さんは、この前に独立法人となりました国立環境研究所の環境情報センター長、南関東地区自然保護事務所長などをされて現在に至っております。この間、ＪＩＣＡのプロジェクトでございました「インドネシア生物多様性保全計画」のリーダーもなされております。この８月より米国東西センターの客員研究員で赴任される予定です。「生物多様性政策の系譜」などの著書がございます。

次に、財団法人世界自然保護基金（ＷＷＦ）ジャパン自然保護室の東梅貞義さんです。東梅さんは、湿地保全、渡り鳥保護、国際協力などをご専門とされまして、岩波書店科学より「水門を開けば自然は戻るのか？－韓国とオランダの事例から考える－」などの著書がございます。

次に、先ほどプレゼンテーションをしていただきました橋本佳明さんです。

以上、六名でパネルディスカッションを展開していきたいと思います。

前半のプレゼンテーションでボルネオの自然のすばらしさ、生物多様性という視点から、世界的に重要なボルネオの自然についての認識を、新たにできたところかと思いますけれども、このパネルディスカッションでは、特にボルネオの自然と地域開発、人間の活動、日本との関係、日本にとっての重要性などをレビューしてみたいと思います。最後に、ボルネオの自然を保全するために我々がすべきことは何なのか、日本としては、または日本人として果たすべきことは何なのかを探ってみたいと思います。

それではまず、ボルネオの生態系の重要性について、現在どのぐらい危機的状況にあるのかということを、パネリスト各々の経験や見識から再度整理してみたいと思います。

まず、東梅さんからよろしくお願いします。

○東梅 貞義（パネリスト）　世界的に見てボルネオが非常に豊かな生物、いろいろな種類がいるということは、先ほどのパネリストの皆さんからお話があったわけです。確かに数は多いんだけれども、それが世界的な位置から見るとどういうふうな重要性があるんだろうかというところに戻って、もう一度皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

種の数が多ければ、それは大切だろうというのは、一般的に考えてわかると思います。本当にそれだけで世界の生物多様性が保全されるかというと、そういう問題だけではないということがまず１つ言えると思います。何が大切かと申しますと、世界の熱帯から、温帯から、寒帯から極地まで、高いところから低いところまで、乾燥したところから湿ったところまで、さまざまな、いろいろなところが守られることが必要になります。そんなさまざまな中で、ボルネオがどんな位置にあるのだろうか、ということを考えてみたいと思うんです。

WWFは 1961 年に設立されて、40 年ぐらいいろいろなところで活動してきましたけれども、この中で１つ反省がありました。確かにプロジェクトは世界的に見て一万件以上やったり、100 カ国でやった。いっぱいプロジェクトをやって何が守られたんだろうかということの反省があるわけです。そうなると、個別に、例えば１つの保護区ができた、ここで多様性の調査をやったというところで成果を上げているのですけれども、まさに先ほどプレゼンテーションの説明にありましたように、半分以上のもともとの熱帯林が失われている。その中で、自然度が高いところは８％である。そうすると、個別のプロジェクトをあそこ、ここ、というふうにやっていくだけでは足りないだろう。それならば、もう一度どこに集中して保全すべきだろうかということを考えてみたのが、この「Global 200 Ecoregions」ということで皆様にお見せしている図です。色のついているところが地球上の大切なところで、リストが 200 ちょっとぐらいですけれども、さらにそれをもう少しボルネオ地方に絞って見てみたいと思います。

そうすると、ボルネオ（カリマンタン）の島があって、そこに幾(いく)つか番号がついているわけです。これはどういうふうな代表的サンプルなんだろうかということをご説明しますと、例えば、真ん中に書いてある Borneo Lowland and Montane Forest（31 番）は、熱帯林の中で湿潤(しつじゅん)な地域、広葉樹の生えているところで重要なところではないか。世界的にそういうところは幾(いく)つもあるわけですが、さらにその中で東洋区、インド・マライア区の中で、特にここが重要であろう。そういう意味では、ほかにこの地域以外にも熱帯雨林と呼ばれるところがあって、またこの地域内にもインドネシア、マレイシア、幾(いく)つか国があるわけですから、その中でも特に大事だということがわかります。これはこういう幾(いく)つかのタイプの中から少しずつ拾っていくことをやっているわけです。

そのほかに、Kinabalu Montane Shrublands（107 番）に相当するところは、灌木であるとか、草地の代表的なものもボルネオ（カリマンタン）に分布している。Greater Sundas Mangroves（140 番）は何の代表例かと申しますと、マングローブというのは世界いろいろなところにありますけれども、このインド・マライア地区の中で、ここのマングローブ

が一番重要であろうと言われています。今までお話しした部分は森林の生態系、ハビタットです。それから、ちょっと見えなくなっていますが、Sundaland Rivers and Swamps（174番）番と書いてあるところは、これまでとは別な区分けとして、河川にも特有な生きものがありますから、どういうところが大切だろうかと見ていったときに、ここの島々の小河川の地域での生物多様性は代表的な例だろうと言われています。Sulu-Sulawesi Seas（218番）はスールー海の珊瑚礁の地域ですね。

ということで、陸上から、淡水から、海から、いろいろな代表例をとって世界中の多様性を保全しましょうと考えたときに、このボルネオという島の中に、そのすべての三要素の代表例が詰まっている。そういう意味で世界的な視点から分析していっても、ここは非常に重要なことが言えるとWWFのネットワークとして考えています。

○草野（コーディネーター）　ありがとうございます。世界的にもこのボルネオの生物多様性が重要なものであるということを説明していただきました。

高橋さん、いかがでしょうか。プロジェクトをインドネシアで運営した観点から、ご経験なども踏まえて、今のボルネオがどういう危機にあるかをご説明いただければと思います。

○高橋　進（パネリスト）　ボルネオ――インドネシア側ではこれをカリマンタンと呼んでおります。先ほど東梅さんからのお話もあり、またこれまでもプレゼンテーションがいろいろありましたように、世界でも非常に生物多様性に富んだ地域、メガダイバーシティ（megadiversity）と言われたり、あるいはそれが非常に危機的な状況にもあるということでホットスポットということも言われたりしております。この場所に私が初めて行きましたのは 10 年ほど前、それもサラワク側だったわけです。ランですとか、あるいは食虫植物ですとか、動物で言えば安間さんからのお話にもありましたが、テングザルなんかを見て非常に感激をしたところです。先ほどの安間さんのお話でも、動物も非常に目につくけれども、じつは、そこは駆け込み寺的に集まってきて、もう周りは開発されているというお話もありました。実際、私はこのボルネオにそう詳しいわけではありませんから、全体がどういう状況なのかということも十分お話しできませんけれども、いわゆる森林火災といいますか、煙害（えんがい）の問題等、いろいろな形でこのボルネオは注目を浴びています。私はこのボルネオの生物多様性の価値というときに、その地域に住んでいる人たちにとって生物多様性がどうなのか、住民の方々、またその地域の地域レベル、あるいはサバ州なり、そういう州レベル、マレイシアという国レベル、さらにはまた地球全体のレベルでの価値がいろいろあると思います。その辺につきまして、また後ほど時間があればお話をしたいと思いますが、そういう生物多様性について、現状は必ずしも安全ではないといいましょう

か、非常に危機感のある状況だという点、具体的ではありませんが、そういう認識を持っているということです。

○川崎　剛（パネリスト）　高橋さんが煙害（えんがい）ということをおっしゃいましたけれども、私は新聞記者としてボルネオ（カリマンタン）というと、煙害（えんがい）ですとか、1980 年代のインドネシア側の紛争とかを考えます。もちろん皆さんが何度もおっしゃったように、生物の多様性を守らなければいけないというのは自明の理としてあるわけですけれども、その島で人々が非常に苦しんでいる、これに何かできないだろうかというのを新聞記者としては常に思うわけです。

1980 年代のスハルト政権下で、ほかの島からカリマンタン側に移住政策が起きて、700 万人が移ったといいます。そのための環境破壊は、恐らく大変ひどいものがあったと思いますし、私はアフリカで、ゴマというところにルワンダの難民が流れたときに、二カ月で森林があっと言う間に消失するのを見ました。それと同じようなことがゆっくりと起こっているでしょうし、そういうことも考えていかなきゃいけないと思います。

○菊地 邦雄（パネリスト）　さっきご紹介いただいたのにちょっとだけ追加させていただきたいと思いますが、私は今ＩＵＣＮに保護地域委員会（ＷＣＰＡ）というのがございまして、それの東アジア地区の代表の副議長です。東アジアというのは、ここは関係ないのですけれども、中国とか、モンゴルとか、日本とか、朝鮮半島の地域ということになっております。

ボルネオというと、私は昔、野生生物課長をやっておりまして、種の保存法とかをやっていたものですから、最初に“ピン”と来るのはオランウータンなんですね。二、三年前に大阪で見つかった。インドネシア側の話で、マレイシア側ではありませんでしたけれども、オランウータンのような大きな哺乳類がいる。それだけ自然が、まさに森が豊かであったということだと思います。

私もいろいろな途上国の自然保護の協力ということであちこち行っておりますが、どこも、いわゆる途上国の自然保護の現場に行って、本当にその自然が満足できる状況にあるところはほとんどなくなってしまっているんですね。豊かだから守るというんじゃなくて、もう少なくなったから守らざるを得ない。そうすると、そこで何が起きているかというと、まさに経済自体が途上国に一周遅れか、むしろ先進国と比べたら二、三周完全に遅れてしまっているわけです。そうなると、社会条件、バックグラウンドがそういう自然保護というところになかなか向いてこない。そこのところを本当にどうするのか、そこがまさに問題であって、これから話があると思いますけれども、日本の協力は、自然そのものを守るということよりも、バックグラウンドの強化に向かっていくように、どういうふうにお手

伝いをするか。ここの場合でも、まさにそこが一番問題ではないか。さっき安間さんが、法律はあるけど守られていない、これが途上国共通の問題でありまして、制度はあるけど守れない、守る気はあっても守れない、それより食う方が先だというのがまさに現状ですので、私の今までの経験から言うと、そのあたりがここにおいても一番問題ではないかと思います。

○草野（コーディネーター）　森も半分以上消えてしまった、生物多様性もどんどん失われているという状況ですけれども、ボルネオの中にはいろいろな少数民族、原住民が住んでいたはずですけれども、今その方々は急速な開発の中でどうなっているのでしょうか。秋野さん。

○秋野 晃司（パネリスト）　私の体験的なお話を交えてですけれども、私がボルネオに関わったのは今から30年ぐらい前です。約30年ぐらい前にクチンの脇にラジャン川がありまして、これを遡（さかのぼ）っていきますと、イバン族とか、あるいはダヤク族という民族集団がおります。非常に長いロングハウス（高床式の集合住宅で廊下を共有して繋（つな）がった長い住宅をいう）に人々は住んでいるわけですが、そこで焼き畑農耕をしている民族集団でした。私自身の出発は、そこの共同体的な研究でしたが、その後、インドネシアに転じてしまいまして、深く関わることはできなかったのですが、この地域の民族集団をどういうふうに分類するか、なかなか難しいのですが、アダット（慣習法）、言語を基準に考えていきますと、20 以上の民族集団が存在すると思います。内陸部の方にはダヤク族と言われる人々、あるいはそのほかいろいろな少数民族がおります。海岸部の方にはマレー人とか、メラナウ族というような人たちですが、この人たちは割合早くからイスラム化、あるいは近代的な中に適応していった人々ですね。それに対して、ダヤク族とか、イバン族とか、こういうような人々は、近代化の流れの中では適応が遅れた民族集団です。一概には言えませんが、精霊信仰（せいれいしんこう）とか、焼き畑、そのほかの農耕、水稲耕作、いろいろなことをやっております。

先ほどからプレゼンテーション等でお話がありましたけれども、1970 年代ぐらいからマレーの方も近代化が進みまして、森林の伐採（ばっさい）、そのほかゴムとか、パームヤシとか、カカオなどのプランテーションが盛んになっています。商品価値のあるものにどんどん変わっていくわけですね。そういう中で、ダヤク族とかイバン族の若い人たちは、そういうところで賃金労働をする、あるいは都市に出て働く状況が生まれてきます。教育のある人は、ロングハウスに戻って焼き畑農耕をするということは、もうしなくなってしまうということが出てくるわけです。

それで、ダヤク族とかイバン族の社会は、基本的には相互扶助（そうごふじょ）的な助け合っていく社会

ですから、こういうような資本主義的な経済システムの流れの中で変容していくことが見られると思います。

○草野（コーディネーター）　例えばイバン族は心霊信仰とかを持っている。環境は信仰みたいなところがあるという人もおりますけれども、環境と深い関わりがあるんじゃないかと思うのです。イバン族というのはムスリムの人たちから言わせると、肉を食べる、サルとかイノシシとかをとって食べちゃう。そういうことでよくないんじゃないかという批判が出たりするわけですけれども、橋本さんどうですか。そういうところを調査しながら、少数民族の方々の暮らしぶりとかを見られてどんなふうにお考えになりますか。

○橋本　私はむしろ、熱帯雨林を一番食っているのは日本人じゃないかと思っています。先住民の密猟や密伐採はありますけれども、サバ州では日々生きていくために野生動物を殺しているわけではないと思います。むしろ行ってみたらわかりますが、熱帯雨林がどんどんとパームヤシ農園に変わっています。パームヤシからとれるヤシノミ油は日本に輸出され、インスタントラーメンやチョコレート、化粧品になって多量に消費される。多分、今、一番熱帯雨林を食っているのは日本人であって、先住民の密猟や密伐採よりも、こちらの方が問題だと思います。

○草野（コーディネーター）　ほかのパネリストの方、今の２つのお話についてご意見ございますか。

○川崎　私はアフリカを 1995 年から 98 年まで三年間歩いていたのですが、ルワンダの内戦からザイールの崩壊にほぼ繋がる時期ですけれども、先住民という社会は奥地に行っても、ほとんどなくなっているんじゃないかなという気がするのです。ボルネオのことはもちろん知らないまま申し上げるのですけれども、貧しい者は貧しく昔のまま暮らしていますけれども、その中で豊かな人は自家発電機を使って、パラボラアンテナを立ててＣＮＮを見ている。昔の村の中に突然、現在が現れている。冷蔵庫を持っていて、コカ・コーラを飲んでいる状態があるのではないか。私は恐らくアジアのどこにも、先住民という形での完全な集団が残っているという気はあまりしないのです。

○草野（コーディネーター）　今回はボルネオのサバの話が中心ですけれども、反対側のカリマンタンの方では、移住政策の進行とともに、森がどんどん焼き払われて、ゾウとかが出てきて、それに対して住民が駆除をするような動きとかいったような話が聞かれておりますけれども、どうでしょう高橋さん、そういうことを見聞きしますか。

○高橋　最近、インドネシアは経済的にはもちろんですが、政治的にも大変混乱をしていまして、各地でいわゆる民族紛争とか、対立とかと言われるものが起きています。その中でカリマンタンを中心に、原因の１つが、先ほどお話のありましたような定住政策によって、ジャワ島といった人口密度の非常に高いところから、カリマンタンなどの人口密度の

低いところに半ば強制的に人を移住させて開拓をさせた。その結果であるとよく言われています。移住していった人たちは、そこで生活をしなければいけませんから、森林を開発すると言いましょうか、伐採をして、そこで農作物等をつくる、あるいはそこで経済的に非常に優位な立場に立つということで、もともとそこにいた先住の人たちと、いろいろな感情的な面も含めて、あるいは宗教的な面も含めて、どうしても対立が起きるという状況かと思います。

ちなみに、地域の人との関わりもそうですが、インドネシア全体で見ますと、外貨獲得が、現在は石油ですとか、天然ガスが第一位になっています。たしか第二位は繊維だったと思うんですね。かつては木材生産も外貨獲得の非常に大きな位置を占めていまして、ボルネオからラワン材と言われるような熱帯材などが、随分伐採されて、外貨獲得に寄与していたわけです。その木材そのものが既に枯渇しつつあるということで、政府もそこは非常に厳しい制限をしております。今、付加価値をつけた合板などでないと輸出できないことにしていまして、現在、木材にかわって第三位の外貨獲得分野は観光政策なんですね。これは生物多様性にも関連してきますけれども、いわゆる観光の中でいうエコ・ツーリズムということも含めて、国立公園などでの観光客誘致ということも、政府は盛んに力を入れているのが現状です。

○草野（コーディネーター）　経済が自然の塊失にかなりの影響を与えているというところにお話が来たかと思いますけれども、サバの場合も、インドネシアの国境を越えてインドネシアの方から難民というか、不法移住が行われてマレイシアの企業に就職していくわけです。その企業は何かというと、プランテーションですけれども、大体はパームオイルの大きなプランテーションに労働者として雇われていることが多いわけです。現在、サバの森林はどんどんなくなっていって、ほとんどがパームヤシに植え替えられているわけです。10 年ぐらい前までは、サバの経済成長は木材の輸出でできたと言われていました。現在では第一位がこのパームオイルになっているし、第二位あたりに観光が来ている。第三位に木材、これはチップ材等に取って代わっているというような状況です。ボルネオが置かれているこういう社会経済的な特徴、サバ、サラワク、カリマンタンを含めてのお話で結構ですけれども、そういうところの重要な要因は何なのでしょうか。先ほど橋本さんから、日本が一番この辺の森林を食っているというお話がありましたけれども、日本はどんなことをしてきたのでしょうか。菊地さん、お願いします。

○菊地　それこそ歴史的に見ても、日本とボルネオの関係は残念な歴史もあるわけです。直接関係ないかもしれませんが、皆さんご承知のとおり、日本でアセス法が動き出したのはつい二年前ですよね。ＯＥＣＤ（経済協力開発機構）の国の中でアセス法がなくて恥ず

かしい思いをしていて、最後にやっとできて、今動いているわけですけれども、そういうものがなくても、日本国内では国民の目があるので、それなりの調査もやり、注意もしながらやってきた。ところが、海外に出て、例えばさっきから出ている伐採をするとか、いろいろな資源の開発をするとか、そういうときにほかの国の企業であれば、もちろんすべてがやっていたとは言いませんけれども、ある程度やるべきアセスメントみたいなことを日本の企業がやってきたのか、あるいは個別の開発だけじゃなくて、全体の影響をどういうふうに把握してきたのであろうか。世界銀行であるとか、国連の機関なんかは、割と早目にもうそこに目が向いていたわけですけれども、日本の、特に民間の協力、あるいは開発はどこまでやってきたのか。それは正直言って我々がいろいろなところで見ても、日本でできないことを外国でやっていたのではないのかな、という反省を持たざるを得ないという例は幾つかあるわけです。

今お話のパームオイルについても、日本がかなりの部分輸入しているのも事実でしょうし、そういう意味で、日本全体の経済活動のうち、日本にできない負の部分をこういうところに押しつけてしまっているというか、負っているというのが随分あると思うんですね。そのこと自体を我々も知らずに日々使っているわけですから、全体で考えなければいけないのも事実ですけど、今ＪＩＣＡがこういうものを始めようとしているときに、せっかく「プログラム協力」とかを始めるのであれば、単にマレイシアサイドのいろいろなところを巻き込むだけじゃなくて、向こうにいる日本のいろいろなところも巻き込みながら、まさに日本が官も民も一体となって、経済開発も含めて、日本全体がこういうところの経済や環境の協力にも尽くしている。こういうプロジェクトを通じて少しいい方に向けていくようになると、相当に貢献するのではないかなという感じは持っております。

○草野（コーディネーター）　日本側の環境教育も大事だということだと思います。ボルネオと言えばオランウータンを思い出すのですけれども、オランウータンの密輸入シンジケートみたいな話も時々ございまして、日本にも来ているという話もあります。川崎さん、いかがですか。

○川崎　大阪でのことです。島のインドネシア側からしいのですが、四頭のオランウータンが不法に来たという話を聞きました。悲しいことです。私もワシントン条約の会議を一回取材したことがありますけれども、日本はどこでも悪者のように言われていました。難しい問題ですけれども、捕鯨と、特にゾウ牙の問題でした。

今、菊地先生がおっしゃられた、過去に日本が何をしてきたかということがジャーナリズムで検証されていないと思ったんです。例えばパームヤシに商社が絡まったりとか、そういうことはあるのでしょうけれども、プラスもマイナスも含めて、私たちは歴史に非常

に疎(うと)い民族みたいなので、その辺をもう一回見る必要があるな、というのを自覚させられたような気がします。

○草野（コーディネーター）　両方見なきゃいかんということですけれども、東梅さんどうですか、何かつけ加えることがあれば…。

○東梅　熱帯林がどんどんなくなっているというのは、いろいろな世界の著名な人も声を上げて、80 年代にほとんどが、これはもう地球環境だということで認識がされたわけです。それは前進だったと思うんですね。そのときに、WWFを初め、いろいろな環境団体もキャンペーンをやりました。持続的ではないものはやめるべきだ、先住民の権利を侵すものはやめるべきだ、それをつくっている、流出させている企業は扱うのをやめるべきだ、実際はそういうことが悪いとわかっていて、自分たちの公共事業の中に使っていくのはやめるべきだ、問題を調査をして、指摘をして、それはおかしいんじゃないかということを提起したわけです。これで問題が片づけばいいのですけれども、それだけではなかなか解決がつかなかったというのが、１つ反省と現状認識として、あるべきではないかと思うんですね。日本も確かに国際的に何もしなかったかというと、そういうわけではなくて、ＩＴＴＯ（国際熱帯木材機関）と呼ばれるような熱帯木材の国際機関の設立から、そういう管理をしてきたわけです。それでも、世の中の経済行為は、１つは規制が必要なわけですけれども、規制だけで 15 年間成功を収(おさ)めたかというと、残念ながら、成功とは言えていないだろう。そうすると、悪いものをやめさせるというだけではなくて、日本がどうやっていいものを育てていくかという視点のところまで、今度は考えていかなければいけない。パームヤシのプランテーション自体、どこまで環境によくできるかというのはかなり厳しいことだとは思うのですけれども、それにしても、その中でも少しでも配慮できるようなところがあるのかどうか、地域としてふさわしいところがあるんだろうか、そういうところの話し合いはこれからあってしかるべきではないかと思います。

○草野（コーディネーター）　少数民族の方々は、森がどんどんなくなっていくがために、海岸沿い、あるいは河川沿いに出てきてウォーターハウスを建てたり、あるいはスコッター（不法土地占拠者）でスラムみたいな状況になって住んでいる人たちも見受けられるのですけれども、現在の開発の影響で、少数民族に対するいろいろな政策がとられているのでしょうか。その辺、秋野さん、ご存じですか。

○秋野　詳しいことはわからないのですけれども、今までのいろいろなお話にありましたけれども、パームヤシとかカカオなどのプランテーション、あるいは森林伐採(ばっさい)等が進んでいる。その結果、生物の多様性が失われていく、あるいはそういう危機的な状況にある。そういう中で、先ほどＪＩＣＡの齋藤さんからご報告がありましたけれども、サバ大学と

か、あちらの環境局等と協力して保全の活動をするということで、これは本当にいいことだなと思うんですね。

昔のことを思い出すのですけれども、カリマンタン側の方が早く森林伐採が進むんですね。ＪＩＣＡは 20 年ぐらい前にサマリンダの大学等で森林再生のプロジェクトをやったと思うんです。そこの研究者の人が、東京農業大学とか東京農工大学に留学していまして、日本語のことや論文等のことで五年ほどお世話したことがあります。その方々が、またサマリンダの大学なんかに戻って森林再生の活動に従事するようになっているわけです。

１つは、こういう経験をボルネオ島全体ということも考えますけれども、今度のサバ州、あるいはサラワク州の保全、さらにできれば森林の再生とか、こういう活動に繋げるようなところに持っていってもらえたらいいな、というのが１つあります。

それから、もう１つは、私は東南アジアの少数民族の研究をしているものですから、社会が非常にはやく変わっていく様を見ているわけです。先ほど言ったように、世の中の変化にうまく適応していくような民族集団と、うまく適応できない民族集団があります。住民参加型の支援、援助がありますので、特に適応できないような少数民族に対する思いやりと言うんでしょうか、本当にこれは何とも言いがたいところなんですけれども、こういう配慮をぜひともしてもらえたらいいなと私は思っています。

○草野（コーディネーター）　その辺、少数民族への配慮を持ちながら、地域住民の参加型でプロジェクトを進めるというところは、我々も肝に銘じていきたいと思います。

社会経済的な現状及び日本との関わりについて、橋本さん、もう少し言いたいことがあると思うのですが、どうでしょう。

○橋本　先月、サバへＪＩＣＡの短期調査に行きました。そのとき、道路がなく、川を船で行かないとたどり着けない奥地の村を訪ねました。奥地といっても、テレビもあるし、文化的な生活をされていて、イメージするような先住民ということではありません。たまたま、その村の子供がラハダトゥ・サイエンス・スクールという学校で寄宿しながら勉強していました。じつは、この学校とサバ大学、人博はサバ州で「ボルネオジャングル体験スクール」を毎夏開催しています。これは、兵庫県下の 26 人の子供たちがダナンバレーの熱帯雨林に泊まり込んで、自然体験をするエコツーリズムですが、これに、ラハダトゥ・サイエンス・スクールの子供８人も毎回参加しています。私も、毎回引率として参加していますが、スクールに参加したサバの子供達の話を聞いてみると、「生まれて初めて熱帯雨林に入った」、「オランウータンを初めて見た」、「これまで，ラフレシアを見たことがない」と言って、日本の子供と同じようにジャングル体験に感動しています。今は、むしろ、もうそういう時代になっていると思います。

○草野（コーディネーター）　日本にいると、現地の人たちは森と親しんでいるんじゃない

かとか、動物と親しんでいるんじゃないかと想像してしまうんですけれども、アフリカでもゾウとかキリンとかライオンを見たことがないという子供たちがたくさんいるんですよね。どうですか、川崎さん。

○川崎　本当にびっくりした話しなんですが、アフリカのタンザニアで動物の絵をお土産に描いている画家が日本に来て「上野動物園で初めてキリンを見ました。」というのです。こういうことは大いにあると思います。私は今、朝日新聞のアジアネットワークという部局で、社外の先生と社内の研究員で「アジアの環境とエネルギー」をテーマにやっていまして、その中に、佐藤仁さんという東京大学大学院の先生から、答えの出ない設問を出されたことがあるのです。それは「なぜ貧しい人々が豊かな森に近いところに住んでいるのか？」。豊かな森は世界の市場で売れるものをつくり出すけれども、貧しい人々には何の利益ももたらさない。第二に、なぜ自然資源が豊かな国は経済的に貧しいのか――アメリカは違うと思いますけれどもね。資源は地球上に不平等に分散されていて、その資源に近づくことができて、市場にアクセスすることができる人が最も利益を得るわけです。資源が希少になればなるほど、遠くてアクセスしにくいところにまで出かけていくようになる。そこで、私たちは手がつけられていない本当の自然と、その近くに住む先住民を見つける。そこでは、市場で売れるものはあまりに貴重で、先住民の人たちには手が届かなくなっている。保護という名目で地元の人々のアクセスができなくなる。こういう力が働くことで、豊かな自然の近くに、それにアクセスできない貧しい人がいるという現状になる。

マレイシアとかアジアの国々は少し違うと思いますけれども、アフリカとか南米の国は、豊かな資源を持っているのに経済運営に失敗したり、腐敗して紛争に至っているという事例が多いような気がします。ですから、国家のエリートが国際的資源を外国の資本――日本の資本も当然関わってきますけれども、自分たちの経済や援助を受けるために使う。そうした問題は中央主権とか民主主義とかも一緒に考えなければいけないんだろうと思います。

○草野（コーディネーター）　情報のアクセスが重要である。これが環境教育に結びつく話だと思うのですけれども、地域住民にもしなければいけないし、都市部の住民にもしなければならない。現地にいる日本人にも環境教育を進めなくてはいけない。そのためには、情報をどうこしらえて、どうアレンジして、研究者だけがわかる情報では困るわけで、それが地域住民、あるいは一般の人たちにわかるように情報ネットワークをつくっていくというのは、どういうふうにすればいいでしょうね。高橋さん、インドネシアでの経験ではいかがですか。

○高橋　情報ネットワークという話ですが、その前に、まずはいろいろな面で、特に生物

多様性の保全といいますと、環境教育といったようなことが出てくるわけです。環境教育の１つは、そういう情報を正確に伝えるということだろうと思います。先ほどからお話の出ている地域の住民の方への対応という中で、インドネシアで定住政策による対立というお話がありました。これは、１つはもともとある森林なり、生物多様性に依存して生活をしていこうという人たちと、新たに入ってきた人たちとの対立、という部分があるわけです。一方で、もともといる人たちでも、括弧付きですけれども、文明的な、文化的な生活をしたいという希望もあるわけです。それは程度の差こそあれ日本でもあるでしょうし、それがもっと大きくなりますと、いわゆる南北問題ということになるわけです。そうしたときに、生物多様性をなぜ保全しなければいけないかということも含めて、環境教育なり、生物多様性の現状なりを正確に伝えていくことが重要だと思います。

多様性の見方として、１つは、先ほどからいろいろお話が出ています生物資源という見方。医薬品や食料品の原材料になる。これは経済学的に言えば財に当たる部分です。もう１つは、我々人類の生存基盤といいましょうか、酸素の供給などを含めて、いわゆるサービス。最近では生態系が提供するサービスといったエコロジカル・サービスという言葉もよく言われますけれども、そういった部分と、大きく分けてこの両方があると思います。この両方について、生物多様性を保全していくというのは、両方をトータルに、統合してやっていくということでしょうから、なぜ保全をしなければいけないのか、どういうものを保全しなければいけないのか、あるいはそれが現在どういう状況なのかということを正確に伝えていくための調査・研究があり、あるいはそれをきちっとストックするような標本なりのコレクションがあり、またそれをさらに束ねてデータベース化していくような情報の整理なりがある。そしてまた、それをアウトプットして教育に繋げていくという一連の流れが重要で、インドネシアの生物多様性プロジェクトでも、そういったようなことをトータルでやってきました。

○草野（コーディネーター）　１つのキーワードとして、自然資源をどう有効に利用していくかというお話が出たかと思います。世界的に見て、特にアフリカとか貧困が進んでいる地域においては、この貧困な人々の自然資源の無秩序な利用が破壊の大きな原因になっているところがあります。先ほど橋本さんが言われましたけれども、サバ、あるいはインドネシアの場合は、高度な経済構造の中で企業とかの活動が自然へ与えている影響が大きいのではないかというようなお話があったかと思います。こういったものに取り組んでいく場合の行政的な課題はどういうものがありますでしょうか。菊地さん、お願いします。

○菊地　大変難しい問いかけです。私は自然保護という問題を長年やってきていますが、国内と、こういうところの問題とでは、何か違いがあるんだろうか。本質的にはないんで

すね。どこが違うかというと、仮にそれで日本が本当に成功しているかどうかは別にして、ある程度守るべきところが守られているとすれば、それはやっぱり住民の方に理解がある。理解という前提には、別にその自然に頼らなくても地元の人たちは食べられるというところが１つ。もう１つは、観光などとある程度両立していて、自然によって生活の糧が得られる。どちらかなんですね。そういうどちらかであれば地元の理解も得られるから、国立公園の指定であるとか、保護区の指定はできるのですけれども、結局そこの自然に、ある程度地元の人が頼らざるを得ない。いろいろな資源を自(みずか)ら得られて、そこが生活の糧であるという場所で、保護と両立しようとか、共生をしようというのは、口で言うのは簡単ですけれども、極めて難しいと思うんですね。

まさにそれが、今の生物多様性条約で言う共生を目指していて、特にそこで先住民の知恵を活かそうとか、言葉ではいろいろ美しいことを言っておりますけれども、地元の人にとって守ることのインセンティブは一体何なんだ、それによって地元の人は何が得られるのかということを、精神論じゃなくて経済的問題として考えた上で、そういうものも与える。こういうと怒られますけれども、両方のバランスをとらないと、途上国の自然保護は、アフリカであろうと、どこでも同じだと思います。私の経験で、今までその辺のバランスが大変難しいな、これは自然保護するより経済開発を先にやらないと、どうしようもないなと思ったところにマダガスカルがあります。ある程度住んでいる人の生活レベルを上げていかないと、そういうところで保護というよりも、生物資源のサステイナブル・ユースみたいなことを考えていかないと、今残っている自然はもう守れない、特に途上国の自然は守れないのではないか。そこのところの知恵を我々として、日本人の知恵だけでは足りないかもしれませんから、まさに地元の人と一緒になって、住んでいる人の経済を十分考えた上で立てないと、むしろ低下してしまうかもしれませんね。

○草野（コーディネーター）　守ることのインセンティブ、特に経済的、あるいは生計的なインセンティブをどう具体的につくるかということの重要さだと思います。来年あたりから実施することを計画しております我々の協力は、調査・研究をして、森林の中の生物多様性、あるいは生態系がどうなっているのかを調査するということも重点的にやります。それから、保護区をどう効率的に管理していったらいいのかということもやります。そのためには、周囲の人々の参加型――巻き込んで、彼らの地域開発、特に資源をどう利用していくかというところ、エコ・ツーリズムなども投入して検討していきます。環境教育を地域住民、都市部の住民に対しても行っていく。こういうように総合的に取り組んでいく予定です。スコープとしては非常に大きいのですけれども、いくら我々の投入が大きくても、政府だけでやるのには限界があるのではないかと考えます。これだけ日本と関わりの

深いボルネオ、特にサバですけれども、日本も企業、あるいはＮＧＯという、民間レベルでの自然環境保全への動きがもっとあってもいいんではないか。できればこういうＪＩＣＡの官ベースでの動きと歩調を合わせて、サバの自然を守っていくという動きが生まれないか。今日は会場に民間の方も、あるいは大学の方々もいらしていると思いますけれども、そういう投げかけをしておいて、後で意見をいただきたいと思います。

パネルディスカッションを閉めるに当たりまして、一言ずつその辺のところも踏まえて、日本として、ボルネオの生態系を守るために何をすべきかというところを、橋本さんから順番にお願いします。

○橋本　私はアリの研究者ですので、アリの話で閉めたいと思います。

ボルネオで二本の木を伐り倒して、その木にいたアリの種類を調べた研究がありますが、二本の木で大体 200 種類のアリが採れています。日本列島で採れるアリが、沖縄まで入れて 250 種類ぐらいですから、たった二本の木を伐るだけで日本列島に棲んでいるアリと同じ種類がいるわけです。今、伐採(ばっさい)などによって、毎年、本州の半分の面積に相当する熱帯雨林が消えていると言われています。そんな状況下で、一体どれぐらいの生きものが生息場所を奪われて消えていっているのか想像もつかない。我々は熱帯雨林にどんな生きものが、どれだけ棲んでいるのかを知らない。ましてや、生態系に関する知識などほとんど持たないのが現状なのです。たとえば、有名な“ラフレシア”。花は直径１ｍぐらいになりますが、その種子はゴマ粒ぐらいしかありません。この種子がブドウカズラの根に寄生しないと花が咲きません。このゴマ粒みたいな種子を誰がブドウカズラの根に運んでいるのか、世界中で誰も知らない。それなのに、熱帯雨林がどんどんと消滅していき、“ラフレシア”も数を減らしているのです。

私たちがまずしないといけないことは、熱帯雨林にどんな生きものがいるかを知ること。これを支援という観点から言えば、熱帯雨林にどんな生きものがどれだけいるかを現地の人々が知ることができるように支援していくことが一番大事です。先ほど、熱帯雨林の薬用植物の活用の話がもありましたけれども、現地の知る力が十分でなければうまくいきません。

例えば、サバ州のとなりのサラワクでこんな事件がありました。外国人がやってきて薬用植物を見つけ、本国で薬にして一儲けした。ところが、現地では植物の分類学が不十分なので、彼らがどの木を持って帰ったのかわからない。そこで、外国人に熱帯雨林の有用な生物を持ち帰られないように、サラワクでは外国の研究者を締め出す厳しい法律をつくりました。これでは、結局、外国の研究者と共同研究もままなりませんから、現地の知る力も伸びないし、新薬の発見もできないことになってしまいます。

環境問題というのは、そこに住んでいる“人”と“地域”の問題です。国と国の話ではないのです。人と人、地域と地域の問題ですから、現地の人々の知る力―研究能力―の向

上をサポートしていく。そして、知る力は、結局“フェイスｔｏファエイス”で、人と人が一緒に活動していく中でしか向上させることはできないのです。この会場には、手弁当でサバ大学に行って、シロアリやハナバチの分類を手伝ってくださった、私の友人も来ています。こういう形で人と人、つまり、顔色で何を考えているかわかるような信頼関係が、濃密にでき上がっていけば、成果が期待できると私は思っています。

○東梅　最後に、２つ申し上げたいと思います。まず１つは、消費者として何がよくて何がいけないのか、ぜひ知ってほしいと思います。単にグリーンのマークがついているから、というのではなく、その中でも信頼できる情報、何が正しいのかを知らなければなりません。例えば、世界でＦＳＣ（Forest Stewardship Council）と呼ばれる森林認証制度があります。これは環境に配慮しているだけでなく、先住民の人々にも配慮しているものです。そういう仕組みで認証を受けた森が、既にマレイシアの中にあるわけです。そういうものを求める人の声が大きくなれば、マーケット、消費者の声が大きくなっていく。買う人の声が大きくなれば、それに対して、もっとそういうものが欲しいという力が強まるわけです。

もう１つは、ＪＩＣＡだけではなくて、いろいろな企業も含め、もっと日本人のいろいろな関わり方があるのではないかということです。簡単な例ですけれども、今、ＷＷＦジャパンとリコー株式会社とが協力して、マレイシアの森林再生をやっています。これは単純に木を植えるということではなくて、現地のパートナーであるＷＷＦマレイシア、サバ大学とも協力して、実際にどんな手法がいいだろうかということも詰めながらやっています。日本の企業が消費国として、大切なところの一部分を応援するという方法が、これからもっと増えてもよいのではないかと思っています。

○高橋　先ほど生物多様性の価値が大きく２つあるというお話をしました。１つは生物資源、もう１つは人類の生存基盤です。生物資源につきましては、先ほども話しましたけれども、医薬品ですとか、あるいは食料品ということで、非常にわかりやすいものです。つまり、国際協力をしてもらって、それが場合によると金になる可能性があるということですね。

先ほどプレゼンテーションの中にも出てまいりましたが、コスタ・リカのＩＮＢｉｏという生物多様性の面では非常に先進的といいましょうか、１つのモデルになる研究所があります。そこではアメリカのメルク社という製薬会社と契約をしまして、多様性の情報を提供するかわりに、研究所の運営とか保護区管理などの資金を得ているということです。例えば、生物資源についての二国間援助・協力は非常にわかりやすい、理解しやすいものですけれども、一方でまた、人類の生存基盤という面は逆にわかりにくい。なぜ自分たち

が、ある意味では開発を我慢しながら保全をしていかなければいけないのか。これは世界全体の共通の責任という部分もありますから、そういうところをいかにして保全をしていくのか、あるいは理解をしてもらうのかというところが１つのカギだと思います。

私は決して二国間協力が悪いと言っているわけではありませんけれども、二国間協力プラス多国間協力といいましょうか、あるいはいろいろな二国間協力の組み合わせでもいいのですけれども、単に日本と相手国だけではなくて、いろいろな国、あるいはいろいろな機関との連携をとっていくことが大事だと思います。私は勝手にそれを生物多様性保全機構、バイオダイバーシティー・コンサベーション・アライアンス（ＢＣＡ）という名前をつけて、そういうふうにすべきだと提唱しています。

そういう中で、これは必ずしもハードである必要はないのですが、わかりやすくハードの話をしますと、今日のお話にあったような研究所ですとか、あるいは調査のステーションをつくる。それをただ単に、日本と相手国だけが利用するということではなくて、いろいろな国、あるいはいろいろな機関、いろいろな大学の人たちがそれを利用していく。つまり、日本がそういう仕組みを提供した、日本がそこである程度リーダーシップをとりながら多様性保全をしていくというところが重要ではないか。決して閉じられた部分だけで、カウンターパートとだけでやるのではなくて、できるだけ広い連携が必要。これはＪＩＣＡ、あるいは日本のＯＤＡの枠を超えた話になるかもしれませんけれども、そういうことが必要だと思いまして、私はインドネシアではそういうことをできるだけ実践していったわけです。

今度はマレイシアで、いろいろな機関が加わって「プログラム協力」という形で行われるということです。私も口ではそれがいいと言っていますが、私の経験から二つのカウンターパート機関との連携だけでも大変だったので、実際にそれを実施するプロジェクト・リーダーの方は大変だなと思います。実施に際しては、それぞれいろいろな方のご協力を得ながらやっていく必要がもちろんあるわけですが、ぜひマレイシアのこの「プログラム協力」を推進していただきたいと思っています。

パネルディスカッションへの質疑応答

○草野（コーディネーター）　時間が来てしまいしまたので、ほかのご三方には会場からの意見をいただいた後で、最後に取りまとめでコメントをいただくということにして、会場の皆さんからご意見をいただきたいと思います。

例えば、サバ州には動物園がないんです。それで、動物園を欲しがっています。環境関係の学生をどんどん増やしたいとも思っています。けれども、奨学金が足りない、という話もあります。微生物等の研究もしたい、薬品開発もしたい、そういうところでは日本の薬品会社等の協力も欲しがっています。先ほど、コスタ・リカの例も紹介がありましたけれども、中南米ではアメリカの大学等がリーグを組みまして、夏休みの間に学生さんを連れていって、そこで野外実習、あるいは研究論文を書かせるということをやって、その地域にお金を落としていくこともやっています。そういった交流とか、アイデアが出てくればおもしろいなと思います。まず、プレゼンテーションをしていただいた方へのご質問、あるいはパネリストの方々へのご質問、ご意見、何でも結構ですので、会場の方からいただきたいと思います。

○A氏　私はサバまでは行ってはいないのですが、カリマンタン側に 1997 年の暮れから二年間、ＪＩＣＡ長期派遣専門家として「インドネシア熱帯降雨林研究計画」でサマリンダに行っておりました。ちょうど山火事のあったころです。それから、ＪＩＣＡ短期派遣専門家で二、三度、「インドネシア生物多様性保全計画」で、ボゴールに行っておりました。そのときの私の感想と現状について述べたいと思います。

私の専門はカミキリムシですが、私が行ってやりたいと思ったことは、とりあえずインベントリーをつくる。インベントリーも、ほかの人、地元の人が見てもわかるようなものをつくる。で、最初にＪＩＣＡ長期派遣専門家で行ったときに、ムラワルマン大学の演習林（調査地域 1,000ha ぐらい）を調査し、1998 年の一年間でカミキリムシの図鑑（約 550 種類）をつくりました。これは、とりあえず地元の人にもわかってもらいたいという意味で、すべての種にインドネシア語と英語を並記する形にしました。それから、ムラワルマン大学におりました関係で、大学の校内にどういうカミキリムシがいるのか調査――種類は 52 種と少なかったのですが、それについても図鑑をつくりました。この間、グヌン・ハリムンに入りまして、約 100 種類のカミキリムシの全種カラー写真付き図鑑をつくるということもやりました。

とにかくインベントリーをつくるに当たっては、そのものがどういうものであるか、たとえ間違っていたとしても、どういうものがいたのか、わかってもらう必要がある。たと

え偉い人がわかったとしても、地元民がわからないといけない。マレー語の名前や解説をつけるとかは、絶対必要だと思っています。そういった面に関しては、ＪＩＣＡサイドで資金面で十分に援助していただけます。私もそうやってきました。

そのほか、カリマンタンにおいては、山火事、“火付け”ということも、サバとはまた違った環境の意味合いがあります。これに関して言えば、環境教育は、地元の人間で、本当にやる気のある人間を教育して、またボルネオ側に戻すことが重要です。ただ単に、立場がカウンターパートである、あまりやる気のない人は戻してもダメです。ムラワルマン大学で見ていてわかったのですが、はっきり言って日本から戻ったカウンターパートで、ちゃんとまともに環境教育で地元のために働いている人は、少なくとも今の段階ではいません。現在、若い人間で、非常にやる気のある人はいます。そういう人間をちゃんとピックアップできるような目を、我々は養うべきだろうと思っています。

それから、オランウータンの話がでていましたが、現在、地元では子供のオランウータンが一頭20万から30万インドネシアルピア（日本円でおよそ2,500～4,000円）で取引されています。これが普通です。

カリマンタンが悪くなってしまったのは、インドネシア政府が各州に自治権を早くに与え過ぎたせいではないかという気がしています。特にカリマンタンでは、森林の下に石炭が眠っているところがたくさんあります。これは日本の石炭業者も絡(から)んでいるのですが、「1 ha につき 3,000 万インドネシアルピア（日本円でおよそ 40 万円）を出すから、そこの土地を何とかしろ。」と、これが現状です。これを突きつけられると、地元民はやはり金で転びます。植林するよりも、そこの土地を何とかして売る。カリマンタンでは南スラウェシの方から相当多数が入植しておりまして、ひと月に 1,000 人ぐらい増えている現状です。ヤシ、バナナを植えて自己主張をして土地をどんどん広げていっている。下手に口を出すと命も危ない、身の危険が迫ってきます。

とにかく、きちんとした教育をして、しっかりした人間に戻すことが非常に大事なことではないかと思っております。

まだ、いろいろあるのですが、私だけしゃべってもあれですから、これで終わります。

○草野（コーディネーター）　貴重なご意見ありがとうございます。地元の人がわかるような情報を提供できるようなプロジェクトにしたいと思います。

○Ｂ氏　壇上に高橋さんがいらっしゃいますけれども、私は1997年から2000年までの間、「インドネシア生物多様性保全計画」の環境教育の専門家で行ってきました。そのときの状況を、先ほど菊地さんがちょっと言われました、住民の環境教育という点に関してお話ししたいと思います。

先ほどいろいろお話がありましたけれども、今、インドネシアはボルネオ島に限らず、ジャワ、スマトラ、いろいろなところに人々がいます。場所にもよりますが、私が実際に現場に入ってやってきた限りでは、彼らは大なり小なり、森林に依存して生活していると思いました。依存というのは、いろいろな形があると思うのですけれども、例えば、植物を食べたりとか、薪採取もあるし、焼き畑も非常に森林に依存していると思います。実際に地域の人たちの利用か、それとも保護区をつくっての森林の保護か、という両者の間で非常に対立することは、住民の人にとってみれば、先ほど菊地さんが言われましたように、森林を保護することのインセンティブがないという現状があるわけですね。だから、なぜ保護をしなきゃいけないかということが全くわからない状況です。その中で、実際にインセンティブを高めながらやっていかなければいけない。住民参加という言葉は、言うのは簡単なんですけれども、実際にそれを現場だけでどうやっていくかというのは非常に難しい問題があります。住民が一体どういう生活をしていて、その中で住民参加のプログラムが彼らにとってどういう利益を与えるか考えないといけない。住民参加という言葉だけをとって、人々に話を聞けば、それで住民参加だ、という考え方を持っている。これではいけない。住民参加ということが、一体村人にとってどういう利益を果たすかのか、ということを考えなければいけないと私は思いました。

環境教育と言いましても、先ほど言われていたように、対象が非常に広くて、森林に暮らしている地域の人というのが１つあったとしたら、それ以外にも、都市部の人たち、また先ほど言われた日本の人たちに対しての環境教育というのもあります。環境教育ということが概念的に非常に広いので、一体どこを対象にして、どういう形の環境教育をしていくか考えないと、範囲が非常に広くなってしまって、目的がわかり難くなると思うんですよね。プロジェクトをやる場合に、どういう対象者にどんな環境教育をやるかということを明確にしながらやっていくことが必要ではないかと思いました。

○草野（コーディネーター）　貴重なご意見ありがとうございます。今、住民参加というお話がありましたけれども、この協力の組み立ては、最初に七回ほどワークショップを住民参加でやりまして、その中から出てきた意見を集約して現在のようなプログラムの原型ができて、現在、もう一回の調査をかけて、今度はこのプロジェクトを実施していく人たちの参加型でプログラムを組んでいるんですね。ですから、今言われたところを我々は十分認識しておりまして、今後、現場でも住民参加で地域開発と保全を両方やっていきたいと思います。環境教育に対しても、教育の状況をお渡しする側の意識を十分調べて、彼らの意見を聞きながらやっていきたいと思います。

○Ｃ氏　私は、1999 年から 2000 年までサバ州の森林局に青年海外協力隊の環境教育隊員

として派遣されていました。

本日、皆さんのご意見をお伺いしていて思ったことなんですけれども、サバ州では法律はあるけれども守られていない、それは確かにそのとおりです。今、お話があった住民参加というのも確かに大切なんですけれども、それは決して食べるためというわけではないんです。もちろん、サバ州にも森の中で暮らしている経済的に貧しい住民がいることも事実ですけれども、大規模な違法伐採(ばっさい)は、政治家、官僚、政府のオフィサーであるとか、林業会社に勤めている人々、富裕層に限らず、いろいろな階層のサバの人々が関わって、組織的に、普通に、行われているのが現状です。特にサバの場合、先住民がマジョリティーであるのがサバですから、サバ州で先住民は少数民族ではないのです。その中でも組織的に、普通のこととして行われているのがサバの違法伐採(ばっさい)なわけです。

そういった現状を踏まえて、サバで今一番大切なのは、サバの人々のやる気をどう盛り上げていくかということだと思うのです。やる気を盛り上げるときに、トップダウン、ボトムアップの両方の視点が大事になってくると思います。

トップダウンですけれども、こういうふうに違法伐採(ばっさい)が行われている中で、サバはもうこれ以上、森林で食べていくことができないということがわかっているわけです。サバが森林資源から得られる収入はどんどん下がってきている中で、サバ州政府としても危機的な状況を把握していて、先ほどのプレゼンテーションにもあった、リデュースド・インパクト・ロギング（Reduced Impact Logging）ですとか、エコ・ツーリズムも一生懸命に進めていこうとしている段階にあるわけです。

また、ボトムアップとしても、先ほどから環境教育の話も出ていますが、はっきり言ってサバでの環境教育は日本よりも進んでいるくらい、個々ではさまざまなことが行われています。ＮＧＯ、政府機関の人々を含めて、環境教育の取り組みをしているいろいろなグループがあります。その中で、日本がどういうことをできるか、という話になると、やはりＪＩＣＡの今回のプログラムタイプの協力でも重要視されていることなんでしょうけれども、それをどうやってコーディネーションしていけるか、どうやって動きを盛り上げていけるかということだと思います。ＷＷＦはサバ州でも特に盛んなＮＧＯですけれども、サバ州でいろいろな人がいろいろなＮＧＯだとか政府機関、個人個人がいろいろなところで環境教育だとか、リデュースド・インパクト・ロギングだとか、いろいろな方法から何らかの取り組みをしている。しかし、その間の相互連携は全くなされていない状況です。それをＪＩＣＡがどうやってコーディネーションしていけるかということもありますし、と同時に、先ほどどなたかがおっしゃったように、“コーディネーションする”というのは口で言うのは簡単だけれども、実際には本当に難しいと思います。現地の、特にトップ

の人たちがどれだけ真剣になれるか、というところに成功するかどうかが係っていると思います。

○草野（コーディネーター）　ありがとうございます。現場での経験に基づいた非常に貴重なご意見だと思います。

今、Ｃさんがおっしゃったように、向こうのトップの意識が変わらなきゃダメだというのは、現地で行ったワークショップの中でもかなり出てきまして、毎回、「政治家の意識を変えろ」「環境教育は政治家を変えろ」というカードがどんどん出てきてしまって、最後のころには、結局、政治家を選んだのは我々だ。だから、一般市民が変わらなきゃいけないということで、政治家とか官僚向けの環境教育ではなくて、一般市民の認識を変えるような方向に動かそうということも向こうで議論しておりました。ですから、そういう今のご意見も非常に大事な視点をいただいたと思いますので、参考にしながら、現場でのこれからの細かい計画づくりに活かせていただきたいと思います。

○Ｄ氏　先ほど東梅さんからご紹介いただきましたように、私どもの企業では、サバ州で天然林保全プロジェクトという２つのプロジェクトを展開しておりまして、１つはＷＷＦと一緒にやらせていただいています。

私たちの考え方としまして、この中に各企業の方がどのくらいいらっしゃるかはわからないのですけれども、日本の企業とか、営利を目的としている団体が行っている社会貢献活動の中には、単一種での植林はかなり多い。しかしながら、天然林の復元とか、天然林自身の保全活動はまだまだ十分浸透していないな、という感じがあります。一回失われてしまった自然は、人間ではなかなかつくり出せないし、取り戻せないものである、というのは皆さん共通の認識だと思うのです。そういったことを考えた場合に、多少、お金を使える産業界の人々は、社会貢献という観点に関して、天然林の保全、天然の生態系の保全といったような方向性を打ち出した方が、よりよい地球を残せるのではないかと考えております。

もちろん私ども、営利を目的としている企業だけでは保全活動は十分なものができませんので、ＷＷＦとかＣＩ（Conservation International）とか、そういったＮＧＯの方たちと積極的にパートナーシップを組むことによって保全活動を行っております。そして、ＮＧＯの方たちがプロですので、住民の方々の環境教育はお任せするという形をとっています。逆に日本国内に関しては、私たちがメディアを使うことによって、天然林の復元が大事だということを、何かにつけてＰＲするような方法をとっています。

今年度に関しては、サバ州に会社からエコ・ツアーという形で行きます。地元にお金を落として――これは守るインセンティブになるんじゃないかと考えています。

済みません。前置きが長くなったのですが、最後にご質問をさせていただきたいと思います。これはＪＩＣＡの方にお答え願いしたいのですけれども、ＪＩＣＡは企業やＮＧＯとのパートナーシップに関して、実際にどのくらいやっていきたいと考えているのかを伺いたいと思っております。よろしくお願いいたします。

○草野（コーディネーター）　このプログラムに関してでしょうか、それとも一般論ででしょうか。ちょうど今そこで（隣室）ＪＩＣＡとＮＧＯとの連携についての会議をやっているんですよ。一般論はそっちでかなりやっていると思いますけれども。

○Ｄ氏　それでは、このプロジェクトに関して、ということでお願いします。

○草野（コーディネーター）　このプログラムの協力に参加していただく人材は、これからどういうふうに現地側の準備が進むかというところで決まっていくわけですけれども、その中で、これからいろんな人に参加していただくような流れができるかと思います。当然、中央官庁、あるいは政府、兵庫県の方とか、いろいろな大学から協力をいただくわけですけれども、それだけではできない分野が出てくると思うんですね。そういうものが明らかになったところで、そこにＮＧＯの方に入っていただくことも考えております。

具体的に今見えているのは、例えばマレイシア側は、保護区の中には地域社会はないと言っておりますけれども、現実的には、我々も中にもう不法に住んでいる人たちを若干見ているわけです。そういう人たち、あるいは周辺に住んでいる人たちが、先ほどからでております自然資源を収奪（しゅうだつ）しない生活への切り替え、方向にいくようなところで社会福祉とかをやっていきたいと考えているんですね。このプログラムの中では、そういうところに青年海外協力隊員という形でいろいろな方に入っていただきたいとも思うのですけれども、ＮＧＯの方もそういうところでパートナーになっていただいて、社会福祉、保全から少し離れていくようなところ、例えば衛生とかいう問題に取り組んでいただくようなＮＧＯがございましたら、現地のＮＧＯと連携して、このプログラムの一部分を担っていただくとかいうことも考えております。あるいは緩やかに、この自然保全、生態系保全というところで賛同いただいて、例えばサバ大学の学生さんの奨学金の面倒を見てもらうとか、そういうところの中継ぎをこのＪＩＣＡの協力ができればと考えております。アイデアをどんどんいただければ、我々の限界に照らし合わせて検討していきたいと思います。ありがとうございます。そういうご意見をたくさんいただければと思います。

○Ｅ氏　本日は大変貴重なお話ありがとうございます。

質問というよりかは、提案なんですけれども、社会に広くこういうことをやっているということを知らしめるというか、知ってもらって、皆が手をつないで進めることが基本的に必要だという認識は皆さんお持ちだと思うのですが、そういうときの手段というか、方

法として、こういうことをやるから来てくださいというので、このような集まりに皆さんいらっしゃっているわけですが、こういう方々が頑張っている限りは大体ダメだろうなというのが私の感じでございます。もっと社会に広く協力を求めるという意味では、先ほどの企業ということがありますが、広報に、皆さんに知ってもらうことに長けた企業もあり、あるいは、そういうことに長けたＮＧＯもあり、そういう広報の部分というか、皆さんと一緒にやっているということをはっきり明確に打ち出すという部分での協力はぜひ募(つの)っていただけないかなという感じがいたします。

例えば、今日お示しいただきましたけれども、「サバ州生物多様性保全プログラム協力」なんていう名前を普通にパンフレットに書いているようでは、皆が参加することはあり得ないだろうと思うんですね。ニックネームをつけていったり、キャラクターをつけていったりというノウハウは決して特別なことではない。こういう一般に堅いと思われている仕事について、柔らかい要素を柔軟にまぜていくというあたりは、橋本さんは頷(うなず)いてくださっていますけれども、橋本さんあたりのアイデアを中心に、そういう知恵を持った方々に集まってもらうようにするというご提案をしたいと思います。

○草野（コーディネーター）　どうもありがとうございます。今の貴重なご意見を参考にさせていただきたいと思います。ＪＩＣＡのホームページも最近は大分(だいぶ)豊かになって、我々も少し宣伝上手になったかなと思っていました。これも一部宣伝も兼ねてやっているのですけれども、今のようなご意見をいただきますと、もっともっと勉強しなければいけないということで、ご指導いただければと思います。よろしくお願いします。

○橋本　明日、兵庫県で同じタイトルのシンポジウムをやりますが、今言っていただいたように、兵庫県会場では「ボルネオジャングル体験スクール」に行った子供たちが、舞台の上に立って大人に向かって、ボルネオで体験したこと、ＪＩＣＡにこういうことをしてほしいというメッセージを述べるような時間をつくったり、会場一階フロアに子供たちがボルネオの展示をします。その子供たちをエサにして、お母さん、ご父兄、おじいさん、おばあさんも連れてこようと思っています。あまり堅い集まりでは本当に広がっていかないということで、兵庫県ではそういう工夫をしようと思っています。我々は博物館の研究員でもありますが、こういうイベント屋的なこともいろいろやっていますので、Ｄさんも、もし何か展示をつくりたいとかいうことでしたら、うちの博物館に声をかけていただきましたら、いろいろなことを一緒にやれると思いますので、またよろしくお願いします。

○草野（コーディネーター）　そういう柔軟な対応をＪＩＣＡが学んでいくということです。兵庫県との共催、あるいは連携という最初のプログラムであるというところで、これから進めていきたいと思います。

○Ｆ氏　高橋さんのご指摘は非常に重要であり、私も心から賛成するところです。オープンにして、ほかの国連等のマルチの援助機関とも協調を深めるべきであるというご指摘、私は全く賛成です。

齋藤さんからご説明いただいた「プログラム協力」というやり方に、基本的に私も賛成です。あそこに映していただいた相手方の縦割り機関をプログラムごとにまとめていくという構想がありましたが、あれは極めて必要なことだと思います。しかし、それに対応するものとして映し出された我が方の協力体制で、ＪＩＣＡの技術協力、協力隊云々とありましたが、あれはＪＩＣＡ内部の縦割りを直したいわけですね。ところが、私も五年前までそういうことを謳い続けていたのですが、官庁主導縦割型協力から脱却すれば、ＯＤＡの効果はすぐに二倍にも三倍にもなる。とにかく相手方のニーズ、思い込みではなくて実際の現地受益者のニーズを基にして協力体制をつくれば、つまり農業もあり、林業もあり、社会開発も入ってくるというようなニーズがあったとすれば、それに応ずるような協力体制を我が方がつくるべきである。つまり、「プログラム協力」をやるのであれば、我が方も縦割りからの脱却をもっと大きい枠の中で図っていった方がいいのではないか。これはＪＩＣＡに対する応援歌みたいなことになるかもしれない。応援団ですね。“フレーフレー”です。

それから、もう１つボルネオにおける生物多様性保全ということがテーマになっているわけですが、これはグローバル・イシューである熱帯雨林の生物多様性保全ということが大枠としてあるんだと思います。そうすると、ボルネオに限らず東南アジア、アマゾンがあり、西アフリカがあり、ということになるんだと思いますが、そういう中の１つとしての位置づけをはっきりさせていった方がいいのではないか。「熱帯雨林の中で非常に重要な東南アジアの熱帯雨林保全のためにボルネオでこういうふうに協力します。」と。しかし、先ほどから皆さんの話に出てきますように、東カリマンタン（サマリンダ）で熱帯降雨林研究センターという無償資金協力をしていたわけですね。そことの協力がここに謳われていないのはちょっとおかしいのではないか。

さらに言うならば、ＪＩＣＡの仕事の中でも、残念ながら中断されましたけれども、ペルーのアマゾン源流地域で協力の経験がある。ＪＩＣＡの中でもネットワーク化を図るとともに、どこで仕事をするにしても、高橋さんがご指摘なさったように、このシンポジウムのように協力もオープンであるべきだと考えております。その方向に進んでいただけるように期待しております。

○草野（コーディネーター）　強力な応援、ありがとうございます。どうですか、部長、お答えするようなことはありますか。

○宮川 秀樹（ＪＩＣＡ森林・自然環境協力部長）　ありがとうございます。今、Ｆさんの指摘されました日本の協力する側の縦割りの弊害は、私もＪＩＣＡにいていつも感じるのですけれども、まだ完全に脱却できておりません。じつは、今ご指摘のあったように、自然環境の周辺の社会を考えたときは、社会開発とか、あるいはそこに住む人のプライマリー・ヘルス、保健医療、あるいは食糧、こういった問題が必ずあるわけでして、これに対応するためには、森林・自然環境協力部だけではなくて、農業開発とか社会開発、医療保健といったオールＪＩＣＡで対応しなくてはならない問題だと前々から気づいております。それに対してＪＩＣＡの中から、あるべき姿に向けて変えていかなくてはいけないなと考えているところでありました。非常に心強いバックアップ、支援を受けたと感じております。

それから、サマリンダのプロジェクトというのは、1985 年から 2000 年まで 15 年間やりました「インドネシア熱帯降雨林研究計画」でして、最初に発言されたＡさんが派遣専門家で行っておられましたムラワルマン大学との協力研究プロジェクトです。たしか、安間さんも派遣専門家として行っておられたと思います。これは、相当大きな成果が上がっておりまして、ＪＩＣＡの既に終了したほかのプロジェクトのノウハウ、蓄積を大いに活用してやるべきだということは、まさにおっしゃるとおりです。ペルー・アマゾンも大分離れておりますけれども、現在、ブラジル・アマゾンでも協力は進行中ですから、こういったところのノウハウ、派遣専門家の交流をどんどん活発化させるべきであろうと思います。また、ＪＩＣＡの中でもプロジェクト同士が情報交換・交流できるような制度はありますので、こういったものを活用して、実行していきたいと思っております。

○Ｇ氏　林野庁でＩＴＴＯの担当をしています。生物多様性の保全という今回のシンポジウムを大変楽しみにしておりまして、大変貴重な話を拝聴させていただいてありがとうございました。ＩＴＴＯにおきましても――これは木材貿易と環境保全を両立しようということでやっている機関です。同じボルネオ島で、サラワクと西カリマンタン、東カリマンタンの方でも生物多様性保全のプロジェクトを始めています。トランス・バンウダリー（境界を越えた）というコンセプトがありまして、国境を背にした同じ地域で、その地域の国立公園の木を両国から保全していきましょうというプロジェクトであります。これはご紹介までですけれども、このようなプロジェクトがありますので、こういうところともクォーテーションの中で協力していきたいと思います。

先ほど皆さんから出ています情報の集約というところで、このプロジェクトのアウトプットというところもいろいろなところへ波及していくと思います。私ども森林を利用する側から見ますと、最近は森林認証という面からしましても、先ほど安間先生のお話にも

いろいろありましたように、バンテンは熱帯林の減少の１つの指標であったというところがありますし、橋本さんの発言の“木を伐るとアリがそこにいる”というようなことで、リデュースド・インパクト・ロギングをやる場合におきましても、この木を伐ると生態系にどれだけ影響があるかとか、そういうふうな情報をこのプロジェクトから、現地の人、あるいはそこで木を伐採(ばっさい)している人たちに対してもわかるような情報を集約していけるようになればいいと思っています。

朝日新聞の川崎さんに質問ですけれども、以前、日本では熱帯木材の利用ということでいろいろ問題がありましたけれども、先ほどプランテーションという話がありまして、日本国内の消費者の中に、ここ 10 年ぐらいで熱帯林に対してどういうような意識の変化があったのか。例えば熱帯木材でなくて、先ほど言ったプランテーションの産物を用いた石鹸(せっけん)とか、そのほかの生活用品に対して、日本人がどういうふうに思っているか、ということを何かお知りでしたら教えてください。お願いいたします。

○川崎　いろいろな形で記事は出ているのでしょうけれども、キャンペーンとして何かしたことはなかったと思います。先ほどいろいろ出てきた企業の活動、プランテーション、それから、まず何があるかを知ることとか、１つ１つ私には新しい何かを教えてもらったような感じで、ほかの方々がむしろよく知っているのではないでしょうか。

○東梅　すぐの答えではないのですけれども、熱帯材の場合であれば、どこから来たのか、誰が輸入しているのかがわかる。だから、これをストップしようというキャンペーンがあったんですね。それだけではなくて、パームヤシのプランテーションに対する日本の影響はどうだろうかという問い合わせがあって、担当の者が調べてみたことがあったそうです。単純にボルネオのプランテーションから真っすぐ日本に輸入されるわけではなくて、再加工を経て、それからまた輸入されるというケースもあるので、簡単にすぐわかる状態ではないというのが一点わかりました。

それからあと、消費者にとってそれがどこから来ているのかというのは、まだあまり関心がなくて、いい石鹸(せっけん)、環境にやさしい石鹸(せっけん)を使いたいと言っているときには、自分の環境の話をしていて、生産地の話はまだ頭に入っていないだろう。それはこれから非常に大事なことだと思います。限られた情報ですけれども。

○草野（コーディネーター）　Ｇさんありがとうございました。ＩＴＴＯのプロジェクトのお話はそのうちに伺いますので、よろしくお願いします。情報の共有等でいろいろ連携できるかと思います。

○H氏　今日お話を伺っておりまして大変興味深く感じましたし、また、先月の「アフリカの大自然の保全」シンポジウムにも出席させていただきまして、大変有意義であると感

謝しております。

１つだけ申し上げたいのは、森林開発、もう少し大きく言えば、大自然の未開発の自然へ我々が入っていろいろ開発をやることによって被るであろうリスクを、どうしても考えないわけにはいかないのではないかと思っております。つまり、皆さんご承知のエボラとかマールブルグは致死率が非常に高い、今まで人類が経験したことがないようなウイルスがアフリカの熱帯雨林の中にあって、それがいろいろな経緯で広がる危険性を含んでいるということです。古くは黄熱病なども、アフリカの熱帯雨林の中から出てきたでろうと言われていますし、ＨＩＶそのものにつきましても、あるウイルス学者は、アフリカの熱帯雨林のサルの中から出てきて、だんだん“ヒト”に感染していく間にこういうことになったんだろうということも、これはまだ学説ですから確定的なことではありませんけれども、そういうふうなリスクが非常に高い。卑近な例が、マレイシアでも昨年、一昨年で150万頭ぐらい飼っている養豚場で、これも未知のニッパ（ニパ）・ウイルス感染症（Nipah virus infection）――ニッパというのは村の名前からとっています。ウイルスの本体は現在、究明の途上にあるそうですけれども、養豚場がだんだん開発されていって、大自然の森林の近くまでどんどん発展していったために、恐らくウイルスに感染し、それがまた“ヒト”に罹って150人ぐらい亡くなった。マレイシアの養豚業は、そのために現在でも壊滅状態になっている。こういう事実もあるようですし、太平洋戦争中、日本の将兵の方々はマレイシアやボルネオ、パプア・ニューギニア、インドネシアのジャングルの中を何日もかかって行軍する過程において、１つの部隊で何人かは病気になる。マラリアと言っておりますけれども、全部がマラリアではなくて、ほかの未知の病気にも罹っている。同じようなことが当時の米軍、あるいは連合軍の医療部隊からの報告、あるいは科学文献の中に見られます。そういうふうに、私どもは森林というのは非常に危険なところだと思っております。昆虫をサーベイしたり、かなり気軽に入って行かれるように思いますけれども、本当にこれからそういうふうな方法で行っていいものかどうか。恐らくそういうプロジェクトには、そういう病原微生物を分類する、蚊を集めて、それから未知のウイルスを分類したり、あるいはキイチゴや野生動物を分類したり、そういうふうな面のご研究といいますか、モニタリングだとかサーベイランスもやっていかないといけないのではないかと思うのですが、１つご考察いただきたいと思います。

○草野（コーディネーター）　ありがとうございます。十分留意して入っていきたいと思います。

ニッパ（ニパ）・ウイルスにつきましては、今年から研究協力で解明のための協力を開始します。それでどういうウイルスか同定して、対策が練られればと思っております。

○Ｉ氏　青年海外協力隊のＯＢです。今回、会場入口にちょっとしたポスター展示というか、壁新聞みたいなものを展示したのは、ボルネオのチョウという図鑑をつくられた大塚一壽先生と、私の前にいる杉本啓子さんと、私――青年海外協力隊とシニア海外ボランティアでサバ・パークスのキナバル国立公園ポーリン温泉で暮らしていた者たちです。

我々三人のボランティアが過去、サバ・パークスで働いてきたのですが、それぞれの現時点で考えることについては、ポスターのところにワープロで書いたものがあります。大塚先生の考え方と、杉本さんの考え方と、私の考え方では、それぞれの違いはあるのですが、最後、撤収しろと言われるまではあそこに張っておこうと思うので、よろしかったら見ていただきたいと思います。

私が今回のパネルディスカッションのタイトル「ボルネオの生態系保全のために日本は何ができるか」ということで考えた部分と、今日パネルディスカッションに参加して考えたところがあるのですが、単純に思うのは、有明海の諫早(いさはや)問題で擦(す)った揉(も)んだをやっている日本に、ボルネオの自然云々(うんぬん)ということが果たしてできるのかなと私は思う部分がございます。

では、何ができるかという話ですが、今回のプレゼンテーションの中で、サバ大学のマリアッティ先生が、若いネイティブの研究者の卵たちに、スカラシップ（奨学金）といったような資金的援助をして欲しいと言われたことが、非常に私は印象に残りました。マレイシア側からの、大学の先生からではありますが、資金、お金が欲しいということは私にとってはわかりやすかったことです。

マレイシアのマハティール首相がずっと言ってきていることは、日本に求めるものとして、援助ではなくパートナーとしてこの地域におけるリーダーシップの発揮を日本にやって欲しいということだったと思います。今回のＯＤＡとかの話を聞いていると、どうしても上から下、北から南という構図が見えてきてしまうのですが、例えば日本がマッキントッシュのパソコンを買うとして、アメリカの商品ではあるのですが、実際につくっているのは東アジアにあるという構造がある。アジアの国々自体が日本の置かれている立場を見据(みす)えたうえで発言をしてきている時代だと思うんですね。その中で最も先鋭的というか、ブレーンを担(にな)っているのはマレイシアではないかと捉(とら)えています。そういった中で、上から下、北から南といった構図のようなものが、一体時代の状況に合っているのかなという疑問を感じています。

大事なことは、上から下という構図を反転させて考え直してみる、役割を逆にしてみるような、マレイシア側から見た日本にやって欲しいこと、日本のあるべき姿を捉えて、我々はそうできるのか、できないのかといった姿勢の時代なのではないかと思っております。

○草野（コーディネーター）　これもまた現地での体験を踏まえた貴重なご意見、ありがとうございました。

それでは、パネリストの中で残りの三人の方、時間も過ぎてしまいましたので一分ぐらいずつでお願いします。

○秋野　いろいろないい勉強になりました。一言ですけれども、情報の共有化ということですが、私の大学は別に調理だけの大学ではありませんので、国際協力学とか、あるいは環境学という講座もありますし、研究室もあります。先ほど出ていましたけれども、サバとＪＩＣＡ、あるいは兵庫県立人と自然の博物館とか、いろいろな民間団体があります。この保護活動もこれから続くと思いますけれども、それを大学等にぜひ、流していただく、あるいはインターネット等で共有して、授業などで活かせたらいいな、あるいは大学もこれからは社会的サービスとして、地域を含めていろいろな形で大学の持っている価値を公開していく手筈（てはず）になっていますので、このＪＩＣＡの活動がまた大学の中で活かせられたらいいと思っております。どうぞよろしくお願いします。

○川崎　大変勉強になりました。一番遅れているのは“メディア”ではないかという冷たい視線を感じたのですけれども、確かに開発の問題で、ＪＩＣＡの担当は経済部がやっております。自然保護は科学部がやっております。外務省を持っているのは政治部です。ボルネオはシンガポール支局の管轄です。そういうふうに、私たちの中で問題を大きな問題として、いろいろなところが結局何もしないままにずっと来ているのではないかなという感じを強く持たされました。

すばらしい意見をいっぱい聞いたうえで、その中で１つだけ。これはＪＩＣＡですから、援助ですよね、援助――ＯＤＡはこれから減るわけです。増えることはもうないと思うのですが、その中で私たちはどれだけのことができて、キャパシティーとＯＤＡのあり方の論議をもう一度やってみたいと思いました。

○草野（コーディネーター）　最後に菊地さんにまとめていただきたいと思います。

○菊地　今日の午前中、ＪＩＣＡの研修で『アフリカ地域特設「野生生物保護管理」研修』の講師をやってきたのですが、アフリカの 10 カ国くらいの国立公園の管理をしている方と野生動物の保護・管理をしているプロの方に、これから日本のいろいろな自然保護行政について見られる上での最初のガイダンスみたいな話です。日本のシステムは、アメリカみたいに国が土地を持っていて、それを国が指定して、警察までいて、自ら管理するというシステムとはまったく違います。自分では土地を持たずに、広い土地を保護地域にして、本当に原始的なところから、箱根とか、日光とか、そんなところもある。そういう話をすると、全然理解してもらえないんですね。そのときに、私の方で言うのは、まさに社会の

条件、バックグラウンドとしての歴史とか、人口とか、経済とか、産業とか、もちろん国有林があるとか、民有林があるとか、人工林があるとか、農業があるとか、そういうことがすべて裏返しでこういう行政システムがあるのだから、なぜそういうシステムが日本にあって、それが日本でどういうふうに運営されているか、そこを見てくれ、と。

アフリカの制度は概ね、アメリカ型の国立公園なんですね。そこも同じで、先住民の人がいたり、いろいろな開発があったり、動物が密猟されたりとか、いろいろな問題がある。それはそれぞれの国の社会の条件の裏返しなんだから、そこのところをいいとか悪いとかじゃなくて、まさにそこを見てください。それが自国の何かのシステムに活きればいいんですよ、というのを言うのですけれども、特にアジアは複雑だと思うんですね。アフリカや南米より、アジアは人口が多いだけでも複雑ですから。正直言って、このプロジェクトはなかなか大変だと思います。保全と言うからには、何かを守らなければいけないのでしょうし、共生と言うからには、人と自然が共生しなければいけない。

いずれにしても、日本の制度をそのまま持ち込むとか、あるいはどこかのインターナショナルな制度をそのまま持ち込むとか、それは今このサバでやっている制度そのものが本当に合っているのかどうか、そこのところから含めて、まさに今日何人かの方が言われましたけれども、サバというバックグラウンドのうえで、何をどういうふうに守るのに日本がどれだけ貢献できるか。あまり自然だけを見ないで、人と社会のバックグラウンドをまず十分に把握したうえで、日本が協力するというようなやり方をしていただきたいなと思います。こういうやり方でなければだめという排除型のやり方は、いろいろな社会のシステム、保護のシステムを含めて、それはまず、なかなか受け入れられないと思いますし、そういうことよりも、難しいでしょうけれども、まず何でも受け入れた上でうまくリードするという方向をやらないとだめではないかと思います。

それと、これはＪＩＣＡ主催のシンポジウムですから、１つだけ敢えてお願い方々、私の関わっているものを含めて、こういうものを今後進めるうえで、ＪＩＣＡ自らこういうプロジェクトの評価システムを、まさに、こういうものも評価できるようなシステムに変えないと、多分、今のＪＩＣＡの共通評価システムだと、これは落第になってしまうのではないかと思うんですね。そこのところでいろいろな工夫も必要ではないか。老婆心ながら一言申し上げておきたいと思います。

○草野（コーディネーター）　ありがとうございました。最後に菊地さんにまとめていただきました。

本日の長い時間、皆さんありがとうございました。環境というものはいろいろな要素があって、多角的なアングルで見ていかなければいけないということをたくさん勉強させて

いただきました。本日おいでになった方の中で、技術協力、あるいは援助、ＯＤＡという言葉から、日本の技術を相手に移転するんだとか、あるいは日本の経験とかシステムを相手に教えて指導するというイメージでおいでになった方が多いかと思いますけれども、我々もそろそろ変わりつつあります。特に自然環境問題になった場合は、今何人かの方がおっしゃいましたように、現地の社会が非常に重要です。そこに合った制度、そこに合ったやり方があると思うんですね。ですから、これは我々がでかけて行って指導するとか、移転するとか、そういうような発想ではなくて、一緒に活動して、一緒に保護しようという姿勢でやる。我々も日本では成功していない例かもしれませんけれども、一緒に重要な生物多様性の地域、生態系を守るための方法、その現地に一番見合った方法を一緒に生み出していく、そんな協力ができればと今日考えました。

今日は日本が何ができるかという議論をさせていただきましたけれども、このサバへの協力は、日本としても逆に学ぶものがすごくあるのではないかと思います。

橋本さんが一緒に調査に行ったときに、こういうものがサバで成功したら、日本に逆輸入して、サバでやった経験を日本の自治体が保全運動を進めるうえで参考にできるのではないかというようなお話をしてくれたことがありました。そういう考えを持った兵庫の方々と連携して、このプログラムを展開していけるということで、非常に得がたいパートナーと思っております。

これから、これが五年、六年と続くプログラムになるわけですけれども、皆さん積極的に情報をＪＩＣＡに求められて、何らかの参加をしていただけること、ご支援をいただけることを期待して、パネルディスカッションを終えたいと思います。若干時間を延長してしまいまして申しわけありません。どうもありがとうございます。（拍手）

○安藤（司会進行）　パネリストの皆様、ありがとうございました。

長時間のプログラムにも関わらず、多くの方々に最後までご参加いただきまして、また貴重なご意見を賜りまして本当にありがとうございました。

最後に、何度もお願いして恐縮ですけれども、アンケートへのご協力をよろしくお願いいたします。時間の関係でご発表いただけなかったご意見もあろうかと思いますが、アンケートの裏面には自由記入欄もございます。そちらの方にいろいろご意見をお書きいただければと存じます。よろしくお願いいたします。

それでは、時間が随分過ぎてしまいましたけれども、以上をもちまして「ボルネオ生物多様性保全多様性保全」国際協力公開シンポジウムを終了させていただきます。

本日はどうもありがとうございました。（拍手）

―了―

参加者アンケート集計

本シンポジウムに参加いただいた方々にアンケートの協力をいただきました。

アンケートの内容および結果は以下のとおりです。

Ⅰ．参加者数　127名

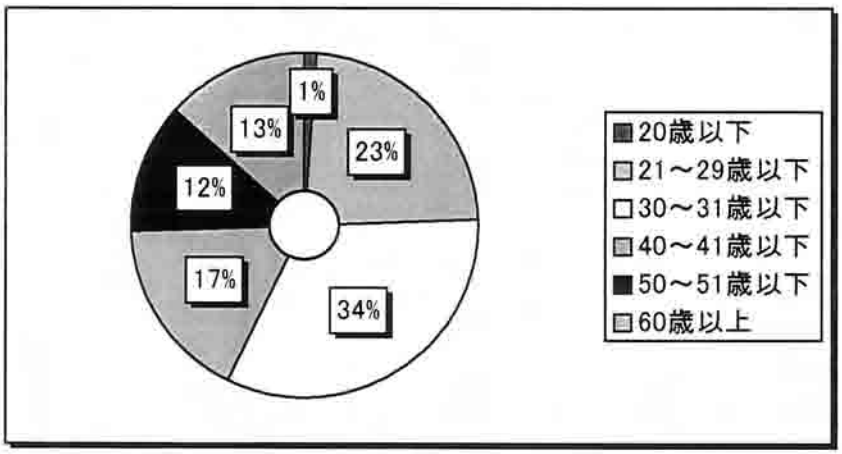
Ⅱ．アンケート回答者数　82名

Ⅲ．回答率　64.56％

1．あなたの属性を教えてください。

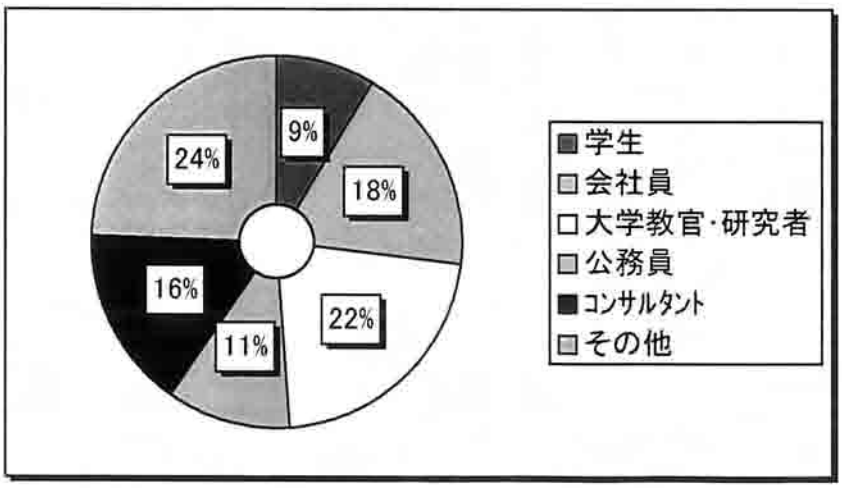
〔年齢〕

20歳以下	21～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳以上	合計
1	19	27	14	10	11	82



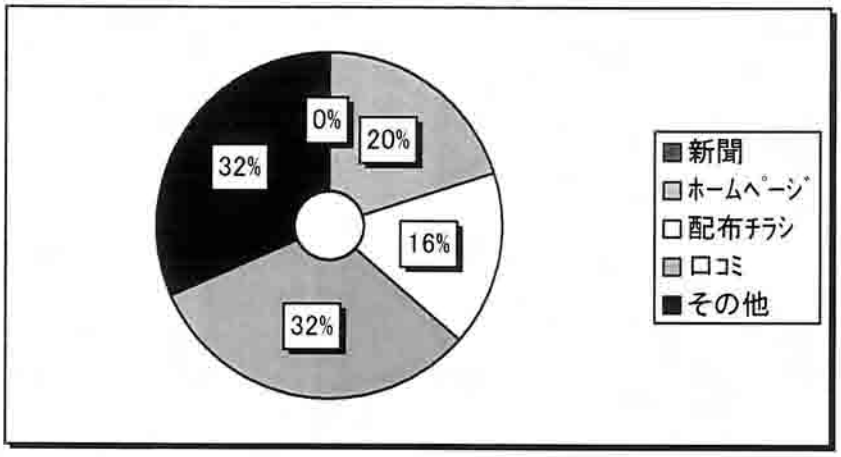
〔職業〕

学生	会社員	大学教官・研究者	公務員	ｺﾝｻﾙﾀﾝﾄ	その他	合計
7	15	18	9	13	20	82



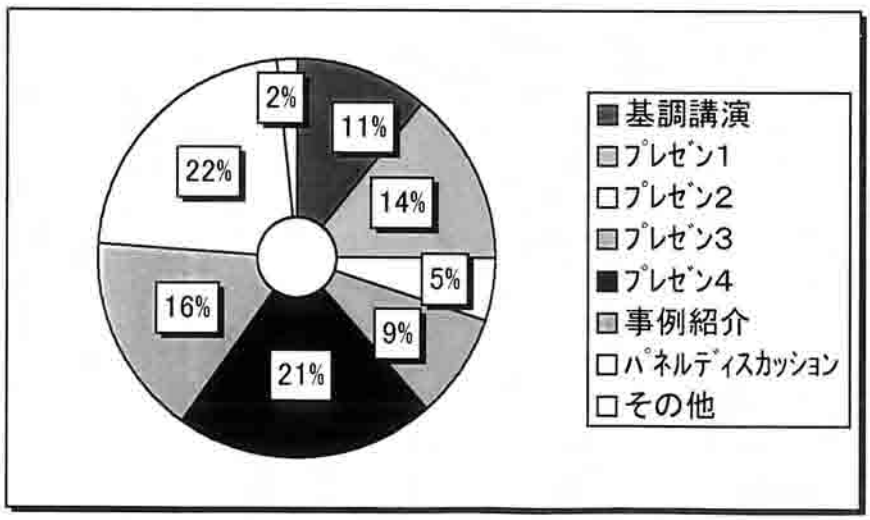
2．今回の講座を何で知りましたか？（複数回答あり）

新聞	ＪＩＣＡ ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ	配布ﾁﾗｼ	知人・友人からの口ｺﾐ	その他	合計
0	17	14	27	27	85



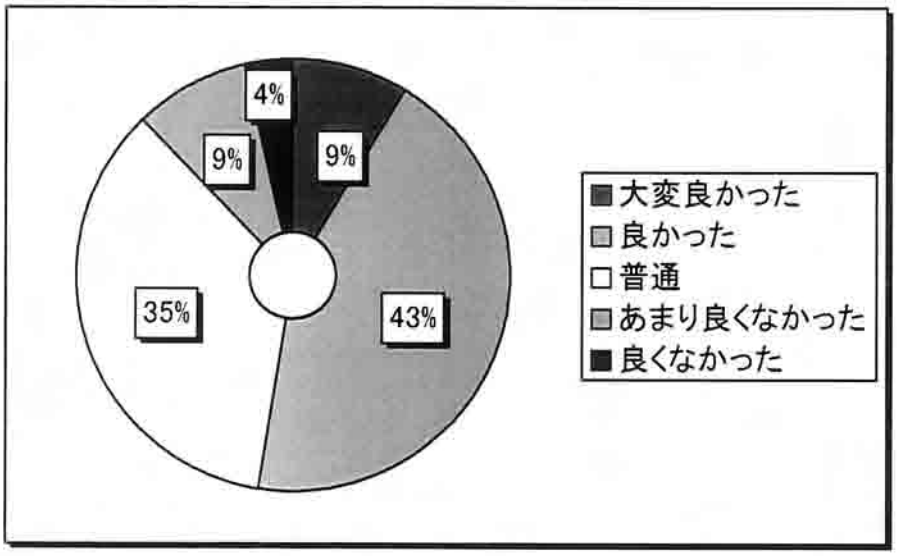
3．今回のシンポジウムで面白かったのは？（複数回答あり）

20	基調講演「人類の原郷ー熱帯雨林ー」（河合雅雄）
26	ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ1「ボルネオの謎に満ちたほ乳類の世界」（安間繁樹）
9	ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ2「チョウ類から見たボルネオ島の生物多様性」（中西明徳）
16	ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ3「サバ大学熱帯生物保全研究所の活動計画」（Dr.Maryati Mohamed）
39	ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ4「ボルネオの人と自然の共生を実現するために」（橋本佳明）
30	事例紹介「マレイシア国サバ州生物多様性保全プログラム協力」（齋藤克郎）
41	パネルディスカッション
3	その他
184	合計



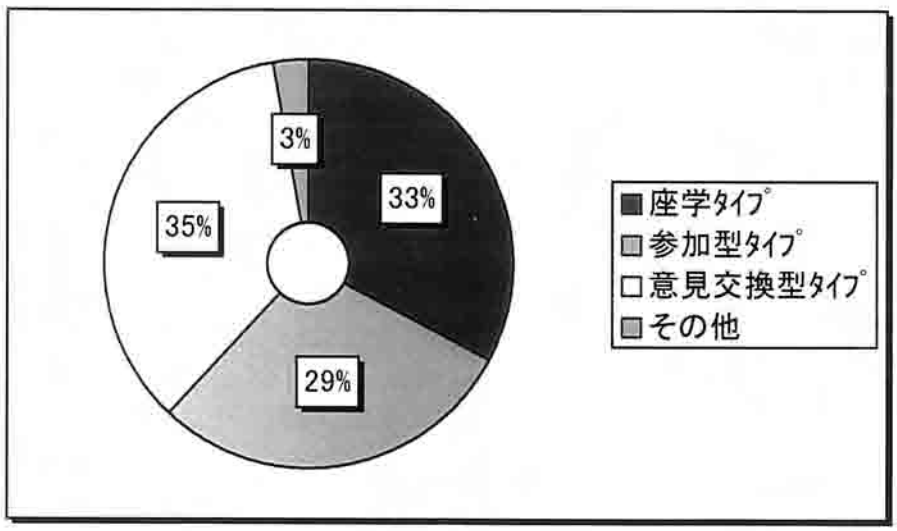
4．シンポジウムの進め方はいかがでしたか？

大変良かった	良かった	普通	あまり良くなかった	良くなかった	合計
7	36	29	7	3	82



5．今後どのような催し物、講座に参加してみたいですか？（複数回答あり）

座学ﾀｲﾌﾟ（講座・講演）	参加型ﾀｲﾌﾟ（実習・実技研修）	意見交換型ﾀｲﾌﾟ（ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ）	その他	合計
36	32	39	3	110



６．あなたがボルネオ保全のために必要だと思うことや、ＪＩＣＡへの要望・意見など自由にご記入ください。

①参加者がこれまで取り組んできた、今後取り組んでいきたい事由

・生態系保全に関わる仕事に就きたいと現在就職活動を行っている。
・ＪＯＣＶ（青年海外協力隊）のＯＧで、サバ州キナバル山国立公園で三年間（1990～93）活動した。今後も何らかのカタチで携わっていきたい。
・出来る限り力になりたい。（他２名）
・コタキナバル日本人学校に三年間勤務していた。
・西カリマンタンのブトゥソ・カソフン国立公園でオラウータン調査を行っている。
・林産、木材利用の研究をしているが、その資源を供給する森林の保全には大変興味がある。
・農工大在学時代、ムラワルマン大学のプロジェクトに参加し、３回ほど短期の専門家として現地に行った。
・現在、多様性保全について大学院で勉強中。
・サバでは10年間研究を続けてきた。（サンダカン森林研究所）
・趣味でクワガタのブリードをやっているがクワガタの数から見ても、ボルネオの生物多様性がとんでもなく高いことに気づかされる。
・サバ州で三年間、マメジカの生態・行動調査をやってきた。研究協力者のような形で今後も参加したい。
・８月後半からボルネオに一週間ほど訪れるので、現地がどのような状況か改めて把握していきたい。
・青年海外協力隊員（環境教育）としてサバ森林局で活動したい。

②参加者からのＪＩＣＡ側への要望、意見

・生態系保全／生物多様性がボルネオ地域の経済開発とどのように結び付けられるかもっと議論が必要。
・ＪＩＣＡのマレイシア協力体制が大幅に変更になっていることに驚いた。
・実際に自然と関わっているレインジャーたちへ教育できるプログラムになることを願う。
・ＪＩＣＡの新しい考え方によるプログラムの成功を祈る。
・地球的な規模で基金団体を設立する必要がある。
・世界各地の保護せねばならぬ地域の情報をデータセンターに集積する必要がある。
・ボランティアを基調とした草の根運動を併行させてより多くの人の意識が熱帯雨林に集まり、その保護現が知れる状態を作る。
・シンポジウムに対するコメントを送るための、メールアドレスを設置してもらいたい。
・生物の多様性を質的な資源とし、森林のバイオマスや土壌の炭素・養分などを量的資源と考え、土地利用法のゾーニングを踏まえながら、評価した資源を経済のシステムに組み込む必要がある。
・守れない規制、法律をつくることは避けてもらいたい。
・国際的な動向、マレイシア国の動向があれば全体的な流れが良くわかったと思う。
・地域ごとの保全のとりあえずのゴールが決められないとどうも調査結果の羅列に終わってしまうのではないか心配だ。
・ボルネオ島の自然と保全について全体像がつかめるよう今回のプレゼンテーションの内容等も含めたビデオを一般向けにつくってもらいたい。
・民間企業からのパネリスト、スピーカーがいればさらに面白かったのではないか。
・ボルネオに関わったことのあるＪＯＣＶ、シニア専門家、派遣専門家を集めたら貴重な

意見が出てくるのではないか。
・農村部の総合開発の一部に多様性保全を組み入れるなら、企業の競争原理に逆行するようなメソッドは取るべきでない。なぜなら、現地の人のニーズは、先進国巨大企業の方向性とリンクしているから。
・今後多様性の保全に持続性を求めるなら、それらの変化に対応できるよう、援助の柔軟性、進化していくプログラムを作るべき。
・ブルネイの森林は豊かな状況を保っている。サバ州の森林保全を図る上では、ブルネイの連携も視野に入れると面白いと思う。
・ＪＩＣＡは一流の人間を派遣してほしい。一流の人材を見抜く目をもってほしい。
・プログラムの進行状況や苦労の様子、成果やノウハウを国内（自治体や市民等）にフィードバックしてほしい。
・しっかりしたＰＤＭを作成して効果的実施に結び付けてもらいたい。そのための職員の育成、専門家の採用の採用選定をしてもらいたい。
・今後、一般向けにもどんどん情報を発信してほしい。（他３名）
・何がどこに存在しているかを調査した結果が様々な分野の人々が発信、収集できる仕組み作りを心がけてほしい。
・西カリマンタンの国立公園管理事務所および森林省のダイレクターと話をしたが、現在彼らが最も重要視しているのが違法伐採のストップである。だが、この点についての意見が何も出てこなかったので、パネリスト・プレゼンテーターの現状認識を訝しく感じた。
・ボルネオ保全のための一番重要だと思う「地域住民への環境教育」といったことが外務省企画官の一言で済まされている。
・プレゼンテーションの時間が少なかったのが残念。（他３名）
・豊富な経験や知識がある人の発表が、15分ずつしかないのは未消化で終わってしまう気がする。
・ＪＩＣＡや現地の状況に詳しい人でないとこの会はわかりにくいものではないか。
・今回のシンポジウムは知識が断片的すぎて全体像がつかみにくい。（他２名）
・パネリストが言っているほどパームオイルが日本に輸出されている割り合いは高いものではないので、聞くものに誤った認識を与えるような誤った発言が行われるのは問題。（他１名）
・ポイントが良く解らない発言があった。
・国際協力の宣伝が不十分、もっと努力すべき。
・開演の挨拶が長い。そのため発表内容が中途半端になってしまったのが残念。

③その他
・大変有意義だった。今後も続けていってほしい。（他４名）
・シンポジウム出席者の年齢が若いのに驚くと同時に、今後の活躍に大きな期待が持てそうで、心強い限りである。
・橋本佳明氏の「人と人との関わりが成果をもたらす」という意見に賛成。
・パネルディスカッションは興味深く参考になった。（他２名）
・日本側の意識改革やそのための啓発が重要で、ＪＩＣＡのプログラム協力においても日系企業等を巻き込むべきだという菊地先生の指摘は非常に的確。
・貴重な意見が聞けて勉強になった。（他２名）
・天然林に対するインパクトを減らすために生物多様性を持ち出すのは、先進国のエゴに過ぎないのではないか。
・活動内容や活動計画についてアウトラインはよくわかり、全体としてはまとまっていたと思う。

・運営自体には時間配分などすぐ修正されてとてもスムースだったと思う。
・一般の人の意見が最後にまとめてあったのは良かった。
・開かれたプログラムになるよう応援していきたい。（他１名）
・ＯＤＡというやり方、ＪＩＣＡを通じて世界とつながるということではなくなって来つつあるという事を感じた。
・発表者の資料を配布してもらいたかった。
・草野さんの進行が良かった。
・サバの人のほうが東京の人より「豊か」で幸せな生活をしている。彼らを貧しいというのは、一方的な見方である。